

---

# 生徒会長は×××!?

FMM遊一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生徒会長は×××!?

### 【Nコード】

N1768X

### 【作者名】

FMM遊一

### 【あらすじ】

主人公、絢栖瀧人は基本的に引きこもりの申し子のような暮らしを送っていた。ある日、幼馴染の稲葉木玖梨紗によって無理やり気味に外に出される。そして出かけた先で……！更に彼の入学した美畑学園の生徒会長は……何者！？ 2011年10月9日追記：本作に出てくる会社名・地名・ゲームやマンガのタイトルなどは、全てフィクションです。似たような名前があっても、勘違いしないで下さい。

うーん、久しぶりの直射日光だ。UVが心配だな（前書き）

どうも、遊一です！久しぶりの方はお久しぶり、初めての人は初めまして。

つてか、前作見た人これ見てくれるかな？まったく逆方向の作品だ  
けど。

では、私の作風をかるーく紹介。

パロネタ多用注意報。以上。

うーん、久しぶりの直射日光だ。UVが心配だな

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

カチツ！

意識が覚醒する前に、本能で時計を止める。

野生的な、と言ったら間違いみたいだから……表現する方法が思いつかない。

時計を止めた俺はゆっくり体を起こす。

「うー、眠い……………」

起こした体の真正面に、映りっぱなしのテレビ（薄型40インチ・地デジ対応）の画面が目に入る。

その画面には、全滅したパーティとボスキャラクター、「GAME OVER」の文字。

（そっぴや、ゲームの途中で眠くなったんだっけ。どこでセーブした？……ボス前ならいいんだけど）

そこらへんに置いてあるコントローラを探すも、手に触れるのはゲームのパッケージやマンガ、未完成のプラモデル。

一応名誉のために言っておこう。俺は決してニートじゃない。引きこもりでもパラサイト・シングルでもない。

これでも中卒で、高校の入学式までの暇つぶしにゲームしてるだけなんだぜ。

決して、長い春休みの間に3回しか外に出てないとか、そういうのじゃないんだ。

そうこうしているうちに、コントローラが見つかる。布団の中にあつた。

「さてと、今度は本気出す」

幸いボス前でセーブしてあったので、そこからすぐ始めた。

「おっと、その魔法は喰らわない……………ここで、技使つて……………あぶねっ、死ぬところだった……………こいつ意外に硬いな……………おしっ、決まった！……………っしゃ！！楽勝、快勝、圧勝！！じゃセーブして……………」

「リアルニートか

！！！」

どすっ！

マンガチツクじゃない音がした。そして痛いを通り越した、へんな感覚がする。

分かるのは、俺が危機に晒されていることだ。

とある幼馴染の手……………いや足によって。

「く、玖梨紗。まだ死にたくないんだけどさ……………」

背後には俺の知っている顔が見える。

茶色の長い髪が揺れる。透き通った目が俺を見据えていた。

そんな暴力とはかけ離れたような風貌の玖梨紗は問答無用と言わんばかりに数多の足技を繰り出す。

「瀧人！昔っからだけど引きこもり癖止めなさい！！」

ミドルキック。ああ、俺のマンガタワーがもろくも崩れ去っていく……………。

痛みなんて、気にしない。

「友達が音信不通なんだよ、しょうがないだろ！」

ここは殴り返すべきだろうが、俺は殴らない。

中学の時から決めてたことだ。

「友達の家に行きなさいよ！！とにかく引きこもるな！！！！」

上段二段蹴り。俺の積みゲーがああああ……………。

痛くなんか……………ない。

「そんなだるいこと出来るか！！」

「だから引きこもりになるんでしょうが！！！！」

ハイキックからの回り蹴り、そして足払いの3連コンボ。勿論転ぶ。

……しまった、背後にはプレスト3が！プレイストア3がああああああああ！！！！！！！！！！

ソフトを買うのではなく、ネットマネーでゲームのデータを買う、ゲームの革命！

ソフトや付属品のプロダクトコードをなくす心配も無ければ、さつきみたいに積みゲーが犠牲になることも無い、まさに神の創造物！！！！

(そんなものを……購入2年で……)

「やらせるかああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

俺は空中で身体をひねり、紙一重で悲劇を避ける。

代償は、数枚のソフト。

「あなた……その運動神経、他のことに使うつもりは無いの？」

玖梨紗は呆れたように溜息をつく。どうやら、殺気は緩んだようだ。

ほっとしてベットに座る。玖梨紗もとなりに座る。

「無い。というか、見られたくない」

「なんでよ?」

(まあ、玖梨紗の言うことも一理あるけど)

自慢じゃないけど、俺の運動神経は並じゃない。

本気を出せば空中で2回転くらい勢い無しでできる。他にも自称高速移動とか。

足技の稲菜木玖梨紗いななきと瞬速の絢栖瀧人あやすとして以前に『4本足の化け物』と揶揄されたこともあった。

(そんなことがあったから嫌なんだけど。言えないよな)

因みに、それを言いふらしていた奴らは影で俺がボコボコにした。

だから玖梨紗は知らないはず。

この話題は鳥肌が立つほど嫌だから、俺は仕方なく重い腰を上げる。

「ちょっと出かける。だから玖梨紗、出てって」

「待って、私も行く!」

こうして、4回目の春休みの外出が始まった。

この時の外出が、今後の人生を大きく変えることなんて、勿論知らなかった。



「うーん、久しぶりの直射日光だ。UVが心配だな」

「女かつ!」

蹴り一発。間違いが無いよう言っておくけど、マゾじゃないから。

で、出てきたはいいけど、目的が無い。

どこ行こうかな？

繁華街でゲーム漁りするか、電車で遠出するか、住宅街でも練り歩くか。

または噴水公園でも行ってみるか、腹減ってるしコンビニでパンでも買うか。

あ、自転車でサイクリングでもしようか？

選択肢はこんなものかな。

それじゃ……………

うーん、久しぶりの直射日光だ。UVが心配だな（後書き）

さっきパロネタ注意報を出したな？ありゃあ嘘だ。

今作は7人のヒロインを順番に攻略していくギャルゲ風の作品です。

もっとも、分岐は最初だけで、あとは選択肢とか無いつもりです。

だって、一体何ルート作ればいいんだってことになりますから。

まあどれくらい続くのか、どこらへんで力尽きるか分かりませんが、応援お願いします。

あと、前作から引き続きミスや改善点などありましたら私に報告お願いします。

はっ。醜く、弱く、粗暴で、無能で、無気力で、夢が無い。人間の屑だな（前書）  
お気づきの方もいると思いますが、サブタイは作者の一存で今回の重要ワードを選びすぎりでコピペしてます。特に、今回は重要です（多分）

はっ。醜く、弱く、粗暴で、無能で、無気力で、夢が無い。人間の屑だな

よし、やっぱゲームソフト見に行くか。

プレスト3があればソフトいらなただけど、不朽の名作をプレイするのも悪くないよな。

「俺はゲーム見に行くけど、来る？」

「なんでそうなるのよっ！」

跳び蹴り。よ、横腹にクリティカル。

「いいじゃないか。外には出てるんだし」

「そんな発想だから、引きこもるんでしょっがっ！」

ギャーギャー騒ぐなあ。まあ、嫌いじゃないけど。

「分かったよ。じゃ、ゲーム見てから飯食べに行こう。それなら文句無いだろ？」

「！」

（なんだ？ギスギスしていた雰囲気が消し飛んだ気がしたぞ？）

よく分からないけど、玖梨紗くじさが黙ってくれたので、俺は近場のゲームショップへと足を運んだ。

がちやがちや。

「おおー、レトロなパッケージ発見！これは面白そうだな」

「瀧人、ゲーム選び終わったらちやんとご飯食べに行くからね」

（分かってるって。さっきから何回目？）

なんだか、玖梨紗の飯に対する執着が半端じゃない。もしかして、朝飯食べてないのかな？

それなら、あんまり時間潰すのも失礼だし、さっさと決めよう。

「それじゃ、『ファイヤーファンタジー？』と『ドラゴンクエスト  
ヨン？』にしよう」

「早くレジ行ってきなさい！」

そういう顔はすごく晴れやか。……もしかして、後で俺められる！？

（買ったらずく逃げる用意をしておこう………命に係わるかも）

そしてレトロゲームコーナーを抜け、レジへ行こうとして。

ゲーム選びをしている女の子に会った。

「うん、これにしよう」

そう言って手に取っていたのは『船上のキュウリ屋』。

たしか、船の上で売上1000万を目指してキュウリをひたすら売るゲーム……だった。

去年のクソゲーランキングBEST10で上位に食い込んでたっけ。

俺はそれを思い出して、つい声をかけてしまった。

「あの、それ、止めたほうがいいと思いますよ？」

すると、女の子は俺に振り向いた。

金色の短い髪を後ろで束ねた、白い肌の女の子。

でも、なんとなく元気が有り余っているような気がした。

「ほえ？君誰？」

ごくごく普通の反応をされる。

「あ、俺はここら辺に住んでる中学生……と高校生の間です」

女の子は白い歯を見せるようにニカッと笑い、口を開く。

「そうなんだ。私は三守千春みもりちはる。よろしく〜」

言いながら差し伸べられた手を、握る。

(やばい、肌スベスベだ……それに可愛い)

正直、ドキつとした。

千春は手を握ったまま、話の続きをする。

「それで、何でこのゲーム止めたほうがいいの？」

俺はクソゲーランキングのことを手短かに話した。

「ってわけです」

千春は感心したように頷いた。

「なるほど〜。それじゃ、止めといたほうがいいかもね。それじゃ、君のお奨めを教えてくださいよ」

「そうですね〜。最近では『モンスターペアレントハンター3rd』しかやってないから、特にお奨めは……あ、『スーパーマリコブラジヤーズ』の新作は面白いつて、『ジャングル』のレビューにありますよ」

「そっか、アリガトね」

千春は『スーパーマリコブラジャーズ』を手に取り、レジへ向かった。

と思ったら、急ブレーキをかけて振り返った。

「忘れてた、君、名前は？」

俺は普通に答えた。

「あやす 絢栖瀧人です！」

千春は最後に蔓延の笑顔を見せ、後ろを向いた。

(可愛い子だったな…同じ年かな？それか少し年下くらい…)

「何やってんのよ、瀧人ー！」

首に激痛が走る。俺はその場で蹲ってしまった。

「首、だめ、絶対」

俺は必死になって玖梨紗を制す。しかし、玖梨紗は聞く耳持たずだ。

「うるさい！何もすることが無い中で、ひたすら女の子を待たせるなんて信じられない！購え！」

「待たせただけで、急所を思いつきり蹴るなんて酷い！俺にも人権はあるのに！」

………こんな騒動があつて、ゲームショップを出たのは20分も後



だった。

「悪かったよ。許してよ」

「ぷーん」

プイっと無視。

「飯は俺が奢るから。な？」

「プーン」

大変だ。ここまでひねくれた玖梨紗のご機嫌取りは時間がかかる。

(どうしたものかな……)

そうこうしているうちに、目的の場所に着いた。

席に着いても、玖梨紗の機嫌は直らない。

「怒ってるのは分かったからさ、何か頼もうぜ？もう10時だし、

朝飯食べてないんだろ？」

玖梨紗は俺に見向きもしないで、メニューを手に取った。

「…まったく、乙女心も知らないで…」

ぼそっと、玖梨紗が何かを呟いた。

「ん？何か言った？」

「なんでも無いわよ」

メニューで顔を隠されてしまった。メニュー越しであっかんべーとかしてるのかな、と勘ぐったり。

(愛想無いなあ。彼氏できそくに無いな)

心の中でそう思った。

何故口に出さないのかと言うと、今までも何度もこう思ったことがあって、口にするたび怒るから。

さすがに学習したよ。何回も顔とか急所蹴られてばね。

玖梨紗が店員を呼んだ。

(……いやいや、俺注文何も決まって無いけど!?)

「お決まりでしょうか、お客様」

営業スマイルで接客する店員。俺は急いでメニューを手に取り、一覧から選ぶ。

「フレンチトーストと焼きサンドイッチとコーヒー」

さっさと玖梨紗が注文を済ます間に、なんとかメニューを決めることが出来た。

「俺はホットドッグとスクランブルエッグとオレンジジュース」

注文をとった店員はさっさと行ってしまふ。

(さっきの愛想の良さはなんだったんだろ……)

そして流れる不穏な雰囲気。

「……………」

(き、気まずい。何か、話題……………)

そして、気付く。引きこもり気味の俺に、女の子と話す話題が無いことに。

沈黙が続いて数分。未だに注文した物が届かない。

「お、遅いな」

「……………」

反応して欲しかった。

な、何か腹に入れば……！厨房、何やってんの！！

そんな時、店内に怒号が響いた。

「っざけんな……！てめえ何様のつもりだ……！」

ざわ……ざわ……。

（これは、利用できるかも？）

もしかしたら、玖梨紗と仲直りできるかもしれない。

「行ってみようぜ」

「っ……………」

露骨にいやな顔されたけど、無理やり連れて行く。

そこで、俺は出会った。

俺の、人生を変える人に。

「あんだ、何なんだよ！イチャモンつけに来たのか！ああん！？」  
怒っているのは店員みたいだ。

20ちよいのお兄さんが声を荒あげている。

対するイチャモン？をつけている客は、沈着冷静だった。

スラリとした身体、するどい目つき、長い髪を後ろで束ねていた。  
髪を後ろで束ねているけど、男っぽい。

「すまない」

(簡単に謝った！？)

けど、目つきからして明らかに謝っているようには見えない。

更に、客が口を動かす。

「貴様のような高卒董貞ニートには、少し難しすぎたようだな」  
怒りを買いに行ってる。そう思った。

その言葉で完全にキれたのか、拳を振り上げる店員。

それを見かねたのか、玖梨紗が騒ぎの真ん中へ行った。

(ええ！？何してんの、玖梨紗あああ！！)

「あんた、止めなさいよ」

皆が玖梨紗に注目を集める。

あ、あれは……………殺る気だ。

(いざとなったら、俺も出るしかないか…………)

願わくば、そうならないことを祈るけど…………無理だな。

「お客様あ、邪魔しないで下さいよ。俺はこいつを殴るんですから」

敬語で何を言ってるんだ、この店員。

その言葉に対する玖梨紗の反応。

「邪魔するわよ。誰だろうと、暴力は許さない」

あちゃあ。後が面倒だな…………。

そう思うと、気が重くなる。

いつも、後処理するのは俺だから。

そして、俺は知ってる。こうなった玖梨紗は止められないって。

「暴力は暴力でしつける」

そう言つて、玖梨紗の足がブレる。

頭直撃。鈍い音が響いた。

「うつ……」

即座に倒れる店員。ノックアウト。

「大丈夫？あんだ」

倒れた店員には見向きもしないで、客の心配をする玖梨紗。

俺は玖梨紗を横目に店員を厨房に運ぶ。

（店長には一部始終嘘を交えて説明しておこう）

客観的に見れば、玖梨紗の方が悪だ。

キれてる店員を蹴つて意識を飛ばしたんだから。

店長に事情を説明して、玖梨紗の元に向かう。

「玖梨紗、待たせたな」

振り返る玖梨紗の表情は、少し緩んでいた。

「悪い奴蹴つたらすつきりしたわ」

(真性のサドかっ!?)

玖梨紗が怖くなった。お、幼馴染が、怖いよう……………。

「すみません、お騒がせして」

一応、問題の客にも頭を下げる。

すると思いきもがけない言葉が返ってきた。

「君は、何故俺を助けた？謎の少女よ」

突然そんなことを言うもんだから、玖梨紗は「えっ？」と声を出す。

「そ、それは、悪い奴が絡んでたからよ。悪い奴は退治しないと駄目でしょ？」

それでも、ちゃんと言った。恥ずかしくないのかな？

客はさらに質問する。

「何故、君がしなければならぬ？悪党なら警察や自衛隊にでも任せればいいだろう。そうだろう、謎の少女よ」

今更だけど、「謎の少女」って何？もうちょっと言い方無いの？

少しイラついた声色で、質問に答える。

「あんたは、困ってたんでしょ？それを見ていられなかったからよ」



客は微動だにせず、三度質問する。

「特に困っていないなかったのだが？ということは、君は自分が満足したいがために暴力を振るった、ということか。妙だな。暴力は許さないのではないのか？」

「っ……………！」

拳が震えている！危ない！

俺は間に入って仲裁する。

「まあまあ、玖梨紗。落ち着いて」

玖梨紗を宥め、客に向き直る。

「貴方も。助けてもらったのに、少し失礼じゃありませんか？」

客は肩をすくめ、質問に答えた。

「助けてもらった覚えなど、無いのだが」

その言葉に、少し怒りを覚えた。

「ふざけないで下さい。玖梨紗がいなければ、殴られていたのかも  
しれないのに」

ちよっとドスの聞いた声で言葉を口にする。

それを実に冷ややかな目で見る客。

「考えてもみるがいい。何の考えも無く、人を怒らせる馬鹿がいると思うか？いるとすれば、そいつはあまりにも醜い人間だ」

（つまり、自分で何とかできたから感謝もしてないってことか？）

だんだん怒りのメーターが上昇しているのが分かる。

沸騰するのも近い。

玖梨紗はと言うと、更に怒りが溜まっているようだ。

短気だからなあ……って危ない！？

「玖梨紗、落ち着け！お前の本気の蹴りは大病院送りに出来る威力なんだぞ！」

必死に説得する。当人の玖梨紗は実に静かに口を開いた。

「大丈夫、こいつの腐った頭を更正させるだけだから」

「駄目だっ！脳震盪起こして死ぬから！」

一生懸命な俺を見て、客は笑い出した。

心から笑っていると言っわけではなさそうだけど。

「はっ。醜く、弱く、粗暴で、無能で、無気力で、夢が無い。人間の屑だな」

ぶつん。何かが、猛烈な勢いでキレた気がした。

「もう一回言ってみなさいよ」

目が据わってる。人を殺す目だ！

「君に言ったつもりは無いのだが。君は未だマシだな。そっちの男はチカスだがな」

バキ。

蹴った。何の躊躇いもなく。頭に。

一撃で男は倒れる。倒れた男を更に踏みつける玖梨紗。

「おいっ、玖梨紗！いい加減にしろよ！！」

俺は後ろから玖梨紗をホールドする。

「離しなさいっ！！！！こいつは、こいつは殺す！！！！！！」

何度も、何度も客を蹴る玖梨紗。

「俺は大丈夫だ！気にするな！」

「けど！だけど！！」

少し泣いているような声を出す玖梨紗。

そこに割って入る、声。

「カスしかないのか、この国は。帰ってくるんじゃないかな、こんな所」

むくり、と。何事もなかったかのように起き上がる客。

「店員、金はここに置いていけど。飯は悪くなかった」

立ち上がりながら金をテーブルに置き、そのまま店を去ろうとする。

それが、なんとなく許せなかった。

「待てよ、お前!!」

ピタッと動きを止める客。そして、ゆっくり振り返る。

「なんだよ、屑。俺は忙しいんだ。身体が6つ欲しいくらいな」

こっちに振り返りきる直前に、俺は全力で走る。

そして、客の目の前で止まる。

「ん?」

客は少し驚いたらしかった。

俺はそこから、胸倉を掴む。

「俺のことならどうとでも言え。けどな、玖梨紗をカスって言う」

のは、やめる」

顔を近づけて、客にしか聞こえないように言った。

これだけは我慢ならなかった。

玖梨紗は引きこもり気味の俺と違うから。

「……やり方が醜いな。だが……」

「その中に、美しさがある」

(は?)

よく分からない。何を言ってるんだこいつは？

「名前を教える」

また、名前を聞かれる。

今度は断ろう、とも考えたが、口が勝手に動いた。

「絢栖。絢栖瀧人だ」

客はにやり、と顔を歪める。

「ほう、珍しい名前だな。俺の名前は

」

「まきがさき みつよし牧ヶ崎光義だ。また会おう、一年生」

そっぴい残して、去っていった。

「……………」

(なんだか、不思議な気分だ)

(今でもイラつくけど……………なんだろう？ボス、みたいなイラつき  
じゃなくてライバル、みたいなイラつきって感じ)

俺がポーっと突っ立っていると、後ろから小突かれる。

玖梨紗が黙って立っていた。

俺は宥めるように話しかけた。

「怒っているのは分かるけど。怒りを抑えて……………」

「……………」

(な、何？何で黙ってるの？こ、こわいいい)

「……………」

黙ったまま、服の袖を掴む幼馴染。

そして、席に連れて行かる。

その後、飯が運ばれ、食べている時も、会計を済ます時も、玖梨紗

は黙ったままだった。

ファミレスを出て、俺は思考する。

(ゲーセン連れて行けば、機嫌直るかな？でも、それは男の意見なんだよな)

(何か奢ろうかな？駄目だ、玖梨紗は貸しを作るのが大嫌いだ)

(このまま帰る……早いな)

俺の無駄一(？)な思考を遮ったのは黙りっぱなしだった玖梨紗だった。

「瀧人」

「は、はいっ！」

なぜか背筋が伸びた。

どんな言葉が飛び出すのか、ドキドキだった。

(憂さ晴らしに殴る、とか言われたらどうしよう……!)

冷や汗をたらたら流しながら、次の言葉を待った。

しかし、次の言葉はあっけなく発せられた。

「今日はもう帰るわよ」

「えっ?」

なん……………だと?

帰るだと?それでいいのか!?

「ほら、早く行くわよ」

くるっ、と身を翻す玖梨紗。

「あ、ああ」

すたすたと歩いていってしまう玖梨紗に、ついていく。

歩きながら、今日のことを振り返る。

妙な一日だったな。久しぶりに外に出たと思ったら美少女に会話し、わけの分からない奴に会話し、玖梨紗の機嫌は分からないし。

でも、なんか大事な日だった気がする。



特に、あの千春って子。

なんとなく、なんとなくだけど、あの人とは今後も付き合うことになる気がする。

はっ。醜く、弱く、粗暴で、無能で、無気力で、夢が無い。人間の屑だな（後書

いや、秋アニメ始まりましたね！やっぱイチオシはFAT / Z  
ROですね！と言つても、作者は t a y a i g h t 見て無いん  
ですけど。友達に勧められて見たら、面白い！続きが気になります  
ね。声優豪華だな、それにしても。後はW O R I N G ！！で  
すな！一期から見ますが、普通に面白い内容ですよ。参考まで  
に、私は相 がいいいキャラしてると思う。他には真剣で私に しな  
さい！とか。これも友達（既プレイ）に推されたのですが：意味不  
明w初見の作者には何が何なのやら……。二話は冒頭が スガつて  
る希ガス……。そして僕には友 がない。あのハ ヒの原作者が書  
いたと言っただから、見ないわけには！……。なんだこれ。途中まん  
ま ルヒじゃないか！まあ、予想できなかつたわけじゃない。最後  
にCきゅー！何となく興味があつたので見た。期待できそう。と  
ころで、きゅーぶって流行ってるの？何、今年の流行語？

さて、他にも今期お奨め作品があつたら、伏字を使用の上作者にお  
知らせください！作者は基本的に流行に乗りづらい人なので。ロ  
きゅーぶ！や花咲く ろは、シユタイズ： ート（アルファベッ  
ト表記は無理、分からない）をまったく見てませんでした（イド  
ル スターは見たよ！）。なので今期も流行に乗り遅れる可能性が  
！助けて！

少し雑談が過ぎました。今回はネタが多かつたもので。

でわ、謝辞を（一話書いてなかつた気もするけど）

一話から引き続き読んでくださつた心優しき読者様、一話を見て「  
なんだ、エロゲに感化されたか」と悪態をつきつつも読んで下さつ  
たツンデレ読者様、今回のうpで手にとって下さつた好奇心旺盛な

読者様、その他様々な理由で読んでくださった読者様全員に感謝の言葉を捧げます。

いやー、ありがとね。おかげで春休みは楽しかったよう〜 (前書き)

作者は完全にアニメ脳です。

後書きはその辺の話題で持ちきりの可能性が……。

いやー、ありがとね。おかげで春休みは楽しかったよう〜

4月5日。引きこもり生活にさよならを告げ、高校生になる境の日。

「瀧人<sup>たきと</sup>！。準備できたのー？」

「待ってー！！」

慣れないネクタイに手間取りながら、急かす母さんに待つよう頼む。入学式に参加するから乗せて行ってくれるというので、着替えを待ってもらっているのだ。

（これでいいかな………？）

鏡を見て確認する。

バランスはいいだろう。長さも、そこそこ（感覚的に）。

「よしっ！」

出発寸前に、最後の確認をする。

（ネクタイ、多分よし。髪の毛、寝癖なし。襟、曲がってない。オツケーー！！）

「今行きまーす！」

思い切り扉を開け、階段を駆け下りる。

(とつとつ、高校生！)

失敗は二つ。

まず、準備に手間取りすぎたこと。

もう一つは、入学シーズンに車に乗ったこと。

その結果が渋滞に巻き込まれてしまったよ！！

「横道無いの？」

「知らないねえ」

なんということでしょう。

学校までまだあるのに……。

(一か八か、走ってみるか……?)

迷った。

走っても間に合う保証は無い。

でも、こうしていたら絶対間に合わない。

だったら、少しでも間に合うほうに賭けよう！

「母さんありがとう、俺走っていくよ！」

ドアを開けて、車道に躍り出て、車と車の間を全速力で走る。

多分、常人の出せるスピードじゃないと思うけど。それでも間に合う気がしない。

「どれだけ混んでるんだよっ」

まだまだ体力は持つ。けど、時間は持ちそうに無い。

(けど、ここで諦めちゃ駄目だ！もう何キロ走った!?)

それを無駄にしたくない。

全力疾走中の俺に、声がかげられたのはそんなことを考えていた時だ。

「よお、困ってるみたいだな？」

横からだ。俺は声のほうを向く。

その人はバイクに乗っていた。

ヘルメットからはみ出ている短い髪は橙色。

しかも、声のトーンから考えると女。

(けど真っ先に突っ込むべきなのは……)

「バイクで歩道走っちゃ駄目じゃないですか!？」

その人はバイクで歩道を爆走中だった。

俺の投げかけに、可愛らしい口から言葉が放たれる。

「お前だって車道を走ってるじゃないか」

(うぐっ)

痛いところを突かれた。それは、そうだ。

と、少し余所見をしていたのが悪かった。

気がつくのと、目の前にサイドミラーがあった。

「うおおっ!?!」

(ぶつかったら面倒どころじゃない!)

急だったので、左足に力を入れる。



そして、ジャンプ。

サイドミラーは見事に回避。

しかし、横から入ってきたバイクは避けられなかった。

「ほわあっ!?!」

見事に、バイクのサドル(?)に乗っかる。

「行くぜ!剥がされるなよ!」

そのまま乱入したバイクは横に突っ切り、再び歩道に入る。

「ちよっ、何してるんです!?!?!」

俺の質問の答えは、すぐ帰ってきた。

「日本にははなかなかすごいな!ってわけで送ってってやるよ!」

(ええー?日本にははってどういうこと?この人外人なの?)

俺の疑問は絶えなかったが、まずは一番一(といっても二番目か)に質問した。

「どこに連れて行く気ですか?」

さっきと同じように即答される。

「美畑学園だろ?その制服、知ってるし」

そして、スピードを上げる。

「一応聞きますけど、誘拐とかしませんよね？」

かなり失礼な質問をした（分かってて聞いた）。けど、謎の女性は「ははっ」と笑ってすごしてくれた。

「何言ってるんだよ。一般人誘拐して何が楽しいんだ？それに美畑には知り合いがいるしな」

それ以上は何も会話しなかった。

更にスピードを上げられ、喋る余裕がなかったから。

「ほら、着いたぜ」

疲労困憊でバイクから降りると、しっかり校門に『美畑学園』と銘打ってあった。

（誘拐されなかった…助かったあ）

失礼な話だが、俺は少しだけ、誘拐の可能性を危惧していた。

でも、ちゃんと連れてきてくれたので、お礼はした。

「あ……………ありがとうございます」

「これくらい、問題なしだ。じゃあな」

謎の女性は名乗ることもなく、かっこよく去っていった。

時計を見る。ばっちし間に合っている。

「ふう。何とかだな」

入学式直前の待合室で、玖梨紗くりさを見つけた。

玖梨紗は既に友達を作ったらしく、4人ほどで固まって話し込んでいた。

（邪魔しないほうがよさそうだな）

俺は荷物を降ろし、座り込む。

すると、早速一人の男子生徒が近寄ってきた。

「ギリギリじゃん。大丈夫か？」

銀髪でかっこよくセットしたっぽい髪をいじりながら、そう聞いてきた。

しかし、ついさっきまで高速で走るバイクにしがみついていた俺が無事であるわけが無く。

「や、やばいかも……」

そう答えた。

「くくく。確かに無事には見えないよな。ぼつさぼさの髪にゆるゆるのネクタイ、どんだけ必死だったんだよお前」

そう言われて身なりを確認する。

「あ”あ”あ”あ”！！！！せつかくセットした髪が！」

絶叫。

窓ガラスに向かい、髪をセットしなおす。

「くし持ってきてて正解だったな」

「女子かああ

！！」

どすっ。

ひ、膝……か。

思いもよらないダメージで、膝をつく。

「おっっっっっっっっっっっい！！！！！！！！！！あたしがどれだけ心配した

「と思ってるのよ！」

俺は絞るように声を出す。

「わ、悪気は無かったんだ。髪の毛のセットとネクタイに手間取って…

…」

目を見る。

（こ、怖い……………幼馴染との関係ってここまでこじれるものだったっけ？）

蹴りを覚悟した。

……………が、二撃目がこない。

「ハア。あんたってほんと、女々しいわね」

ふいつと俺から目を逸らし、どこかに行ってしまった。

（あ、呆れたのか？）

どちらにせよ、助かった……………。

一騒ぎ終わってから、銀髪が寄ってきた。

「あれ、誰だよ？結構かわいいじゃん、同じ中学だったのか？」

俺は嘘偽り無く答えた。

「ああ、幼馴染だよ」

「マジっ!?!?」

銀髪は身を乗り出してきた。

「な、あいつと付き合ってるのか? お前受けで、あいつ攻めだろ?」

俺はその言葉に顔を赤くする(赤くなる)。

「そっ、そんなのじゃない! ただの、純朴な幼馴染だよ!」

そう言うと、銀髪は冷めたようだ。

「なーんだ。ま、それはそれでいいけど」

と、ここでベルが鳴った。

「時間か。体育館行こうぜ」

俺は銀髪と一緒に立ち上がり、教室を後にする。

「そういえば名前聞いてなかったな。なんて言うんだ?」

「俺は<sup>あやし</sup>絢<sup>あやし</sup>瀧<sup>あやし</sup>人。瀧人でいいよ。お前の名前は?」

「俺は<sup>やのた</sup>矢野<sup>やのた</sup>多。矢野多<sup>たつとし</sup>竜俊<sup>たつとし</sup>だ。竜俊<sup>たつとし</sup>でいい」

言いながら竜俊は手を差し出す。

俺はその手を握り、挨拶を交わす。

「こっちこそ、よろしくな」

「…………である。更に…………」

(…………長い)

お約束と言えばお約束だけど、校長の話って何でも長いのかな？

スパツといたい事言えばいいのに。

「瀧人、起きてるか？」

横から竜俊の声が聞こえた。ぼそぼそと、小さい声で。

「起きてる。ホントに長いよな」

俺も小さい声で返答する。

「まったくだ。長く話したって、評価が高くなるわけじゃないのにな」

そうやってやり取りをしていると、いすが揺れた。

「灌人、黙って聞いてなさい！そっちのあんたも」

玖梨紗だ。正義感が強い玖梨紗には、こんなことも許せないわけだ。

「あんたじゃない、俺は矢野多だ！…お前は？」

「私は稲菜木いななきよ。ほら、前向いて黙って聞く！」

ピシヤリと言われ、姿勢を直す俺と竜俊。

（ふう。玖梨紗は正しい事してるんだけど、こればかりはなあ）

「…で、また……………というわけで、……………といえば、…」

校長の弾丸トークは留まるところを知らない。テンションが上がっているのか、息が荒い。

（また、竜俊と駄弁ろうかな）

そう思っつて竜俊に顔を向けようとしたとき。

バァン！と音を立て、体育館の扉が開いた。

そこに立っているのは。



「う、嘘……………でしょ?」

玖梨紗の口から驚きの声が漏れる。

俺だって、必死に口を抑えている状態だ。

扉の先に、あいつ高い背丈、鋭い目つき、腰まである長くて結った髪。

ファミレスで会った、男が立っていた。

その男、まきがさき みつよし牧ヶ崎光義はポケットに手を突っ込んだまま、堂々と歩いていく。校長のほうへ。

どの先生にも咎められることなく、校長の前に立つ。

そして、校長に言い放つ。

「ご苦労、後は任せる」

( ??? )

俺は言ってる意味が分からなかった。任せる?どついでに?と?

俺の質問に答えるように、あいつは振り返り、告げる。

「一年諸君、入学おめでとつ。俺は生徒会長の牧ヶ崎光義だ。醜く、弱く、粗暴で、無能で、無気力で、夢が無い校長に代わり、俺がスピーチをする」

『?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?』

多分、ここに居る全員がこうなったと思う。

超展開すぎて俺にはついていけない。

あ、あれだ。ゲームでいうと『ベットライジング』みたいだ。突然ベットが擬人化して襲い掛かってくるゲーム、あれと同じ感じだ。

そんな超展開は、更に超展開を迎えるのだった。

「絢栖灌人、ここに居るのは分かっている。出て来い」

(っ?!?!?なんで呼ばれたんだ!?!?)

そう思うのもつかの間、あいつはジッとこちらを見ながら言う。

「早く出て来い。あまり人を待たせるな」

ここまで来ると、なんとなく、俺が悪い気がしたから立ち上がった。

そして、壇上に向かって歩く。

牧ヶ崎のように、今度は俺が牧ヶ崎の前に立つ。

「いい顔だ」

俺に小さい声で言った後、皆に向かって宣言した。

「こいつ、絢栖瀧人を生徒会に加入する！依存はあるか!？」

「勝手に何を言ってるんだあんたは!?!?!？」

思わず叫ぶ。

(頭のねじがぶっ飛んでるんじゃないの!?!?この人)

もう緊張と恥ずかしさで思考回路が変な方向に飛んでる。主に俺の。

「と言っても、正式に生徒会になるのは10日後の選挙だ。絢栖瀧人を加入させたくなければ、それまでに人脈を高めておくんだな」

それだけ告げると、そいつは壇上から降りた。

『……………スピーチは!?!?』

総突っ込みだった。

しかし、そいつは動じることなく告げた。

「どうせ聞かないんだろ。だったら時間の無駄、さっさとクラス帰ってレクリエーションでもやってる」

教室。俺は注目の的だった。

「くっそお！絢栖って言ったか？お前牧ヶ崎会長の知り合いなのかよ！ずるいぜ！」

（いや、まあ、印象は最悪だったと思うけど……）

「いいなあ、生徒会。人脈がどうのこうの言ってたけど、多分無理なのよね」

（なんです、それ。どうということ？）

「牧ヶ崎さんは一度決めた事は絶対に曲げない。約束だって一度も破った事が無いそうだし」

（本当？というか、皆物知りだね）

「え？この学校に来たのって牧ヶ崎さんに会うためでしょ？」

（何ですそれ！？なんて追っかけ！あ、だから皆生徒会に入りたいのか？牧ヶ崎と一緒にいられるから！）

「そうそう。才色兼備、あそこまで完璧な人間なんてそうそういな

いよな」

「あんたら、どきなさい!!」

人ごみを除け、現れた生徒。分かっていたけど玖梨紗だった。

「灌人、どういうこと!?!詳しく話してもらおうよ!」

( どういうことって言われてもな )

正直、こっちも困ってる。いきなり生徒会って……Why?

「俺だって知らない。『ベットライジング』くらい分からない」

少し玖梨紗の表情を伺う。

「……………」

何を考えているのか読めない。けど、読めない時に限って何か起きる。

例えば、突然蹴りかかってくるとか。

考えた矢先にブワッ!と音がした。

スカートが舞う。

( やばい!このままじゃ鮮血が! )

作戦設定・血だまりを回避することを最優先事項に設定。

右足に力を入れ、思いっきり後ろに飛ぶ。

ことが出来なかった。びくともしない。

(何故だっ!?)

考えてる暇は無い。目の前には膝。

もう駄目だ……………っ!

「やらせはせん」

そう思った時に、長い髪をなびかせた男が乱入してきた。

横から入ってきた足が玖梨紗の蹴りを止める。

牧ヶ崎。

「っ!なんであんたがここにいるのよ!ホーームルーム中じゃないの!?!」

いつかのように、玖梨紗を見下しながら言い放つ牧ヶ崎。

「ホーームルーム中に人に暴力を振るう醜い奴に言われたくないな」

「ぐっ……………」

黙り込む玖梨紗。そして牧ヶ崎が俺のほうを向く。

「生徒会に入る前に怪我されては困るからな。言動に気をつけることだ」

いい機会だと思い、隙を逃さず質問した。

「会長！なんで俺…僕なんですか！？」

牧ヶ崎はその問いに、あっけなく答えた。

「お前が一番適任だったから」

それだけ言い残して、牧ヶ崎は去っていた。

（よく分からないんだけど……何、一番適任って。まるで俺以外の人も会って……）

ふと、俺はある仮説を思いついた。

隣の竜俊にそれを確かめるために質問を投げかける。

「なあ、初休み中に牧ヶ崎に会ったか？」

「ああ」

即答。

一応、他の奴にも聞くが、皆会っているそうだし。  
つまり。

(牧ヶ崎……春休み中に、ここの新1年全員に会ってたのか!?)

生徒会のメンバーを決めるためだけに!?!ちょっと引くレベルだぞ!  
と考えていると、扉が開く音がした。

またあいつか、とも思ったけど違った。

今度はゲームショップの女の子だった。

(あの子も新1年生だったんだ。三守さん……<sup>みもり</sup>だったっけ?)

三守さんは、教室をきよろきよろと見渡す。

「ねえ、誰か探してるの?」

そんな三守さんに声をかけたのは……名前知らないクラスメイト。

三守さんはその質問に答えた。俺も驚く回答だ。

「うん、このクラスの絢栖君をね。どこかな?」

ナンデ、キョウハ、オレニ、カラム、ヒトガ、オオイノ???



今朝の女の人或か、牧ヶ崎とか、三守さんとか！

もしかして、俺ってトラブルメーカーなの！？

俺が思考の迷路に、竜俊が俺にかける言葉の選択を、玖梨紗が俺への反応を、迷っていた。

「あーやーすー君！」

不意に、三守さんが飛び込んできた。

「ふぉっ!？」

いきなりのことだったから、変な声が出た。バルン星人みたいな。

当然避けられるわけもなく、その体重をもろに受けた。

「なななななななななな何、みみみみみ三守りりりりりりりさんんんんん!??!?!?!」

俺は女の子への免疫がほとんど無い（腐れ縁の玖梨紗を除く）。

だから、抱きつかれるなんて予想外だ。ニテンドーが神ゲーを出すくらい予想外だ。

勿論、思考回路は暴走寸前。「思考回路仕事しろ！」といたくなくなるくらい。

「いやー、ありがとね。おかげで春休みは楽しかったよう〜」

頬に熱が集中している気がした。今の俺の顔は花竜の紅玉と同じくらい真っ赤だろう。

俺が口ごもっているうちに、三守さんは離れた。

「またおすすめゲームがあったら、教えてね！それと、これ私のアドレス」

手に紙切れが押し付けられる。

「んじゃ、まったね」

波乱一（主に俺の頭に）を起こした三守さんは、去った。

同時に目の前に現れる玖梨紗。

「玖梨紗……？別に、不純異性交遊とかじゃあないっすよ」

蹴られた。思いっきり蹴られた。これでもかというほど蹴られた。

薄れいく思考の中、俺は思った。

テンプレを使うと。

（俺の高校生活……波乱ばっかな気がする）

いやー、ありがとね。おかげで春休みは楽しかったよう〜 (後書き)

未だ、会長には第一の顔しかありませんよ。  
つてわけで、テンプレ乙な内容でした。

ん？展開が心配か？

安心しろ、私はエロゲを2作品プレイしているんだ。  
これくらいどうということは……あるなあ (涙)  
しかもプレイした作品の作風がぜんぜん違ってきた。

マジコイとましろ色しなくなってきたよ……。

おっと、アニメ脳じゃない、一般人の読者が呆然としている光景が  
目に浮かぶぜ！ (読者がいること前提)

仕方ない、ここは最近の私の学校生活の話を持ち出そう！

登校 アニメの話に混じる テスト 下校

すまん。私テスト期間だったわ。

因みに情報系 (商業学校の情報学科所属) のテスト86で英語のテ  
スト70でした。

いいほうじゃないか？と自負しています。

さて、ここらでベ・トーとかの話題を持ってきてもいいんだけど、  
置き去りも酷いかと思ってここらで謝辞でしめます。

「なにこれ、意味深なタイトル……」と思って手にとって下さった  
読者様、引き続き読んでくださっている優しい読者様、その他様々  
な気持ちで読んでくださっている読者様方に、感謝の言葉を捧げま  
す。

多分来週も日曜日に投稿すると思うので、その時にまた会いましょ  
う。

GOOD NIGHT!!!

へえ。そうだったの。じゃ、緊張するせいで敬語になっちゃった（前書き）

今ルートメインのキャラは千春だよー。

え？全然出てきて無いじゃんかって？

そりゃあんたら、出まくって即効デレたらそれでも文句言つてしょ？

すいません、完全に言い訳です。

次回は、千春回にします。

へえ。そうだったの。じゃ、緊張するせいで敬語になっちゃったんだ

ビー！

アラートが鳴り、警告がモニターに表示される。

『W O R N I N G ！ ！ ！』

「チイツ！」

俺は機体を反転し、後方の敵に標準を向ける。

そして、範囲内に捕らえたらロックし、迷わずビームを発射する。

ビームは敵の機体に直撃し、画面端に『H I T ！』と表示される。

機体は爆散。俺はレーダーに目を向ける。

味方機体はまだ後方にいる。そして前方に敵の反応が4つ。

「ふつ……この俺の強化された<sup>カスタム</sup>蒼い運命参号機<sup>ブルーディステイオンパースリー</sup>に、撃てぬ敵は無い！4だろうが5だろうがかかってこい！！」

瞬間、レーダーが側面の敵機体を感知した。

その数、3。

「なんだと！？今までそんな反応はなかったというのに……」

ふと、俺は気付く。

(まさか……ステルス機体っ!?)

過ちに気付く前に、集中砲火を受ける。

元来、攻撃があたらないことを前提にカスタマイズしたこの機体が、7機の機体の攻撃を受けて耐えられるはずが無かった。

あっという間に装甲が削られる。

「くそぉ…………俺の、慢心が敗北に導いたとでもいうのか……………」

俺は操縦系統から手を離し、眩い光に目を細めた……………。

『敗北』

間違いなく、テレビにはそう表示されている。

表示されるスコア。

共に戦った戦友たちのスコアは0。

俺のスコアは1。

俺はその画面の前に少し考える。

「やっぱり味方を放置して前線突っ切るべきじゃないよなあ。でも、皆で行っても7機も倒せるのかよ…?」

その時、耳に装着したヘッドホンから声が聞こえる。

「マジドマデーすwwwwまあ相手が強すぎましたわwwww」

送信主は『俺様』。プライベート回線のようだ。

彼は使っている機体と同じランクだから、腕もそこそこあると思うのだけれど、結構あっけなく落ちた。

俺は受信モードから送信モードに切り替える。

「まったく、作戦負けっすね。オーバー」

俺もプライベートで返答して、受信モードにする。

俺の通信機は受信送信が同時に出来ないタイプだから、いちいち「オーバー」とか「どうぞ」とか言う必要がある。

再び声が聞こえる。相手は『俺様』。

「でも、1機落としてましたよねwwwwあれはマジ上手かった

「すｗｗｗｗ」

送信モードにして、返答する。

「言ったでしょ？作戦負けだって。実力と知能の両方が備わってる奴ってすごいですよ。オーバー」

受信モードにすると、間髪入れず返ってきた。

相手は『ぺっぺくん』。使っている機体から、中級者と読んだ。俺のよりは弱い機体で扱っても下手。

どうやら、味方プレイヤー全員に送っているらしい。

「今度は皆で左から攻めます。なので、勝手に先行しないで下さい」  
最後の忠告は、多分俺に対する皮肉だろう。

送信モードにする。俺もプレイヤー全員に送る。

「いや、右っすね。左は上り坂になっています。予想であっちは熟練者ばっかなので上り坂の斜面を使ったハメ技使ってきますよ」

正直、俺も斜面ハメ（通称）できるけど、こっちはそこまで上手い奴が揃っているわけじゃない。

ハメにかかりまくるのが目に見えていた。

だったら、平坦な右ルートから攻め込んだほうが得策のはず。



その後も口論があつたが、俺の意見が優先され、右から攻めることになった。

機体の選択。

「相手は上手いから、ここはセオリーに従うとするか……」

セオリー。上手い奴は回避が特に上手いから銃撃戦は不利。

だったら、少しの被弾を覚悟して接近戦を狙う。

というわけで、俺が選んだ機体は『ストライクオースタム直撃・改』。銃は窒素なマシンガンだけ。格闘攻撃によって真価を発揮する機体だ。

出撃までのわずかな時間の間、目を閉じる。

(敵は熟練者で、連携も絶妙だ。まともじゃって勝てる相手じゃない)  
い)

(だったら、まともじゃ戦わなだけで)

出撃シーンの楽曲が流れ、俺は目を開ける。

視界が、広がった。

と思ったのだが、いつになっても真っ暗だった。

目は開けている。けど、目の前が真っ暗。

「あれ？突然ブラックアウト？」

コードが接触不良？このタイミングで？

とりあえず電源のコードを探っていく。

すると、何かに顔があたった。

見上げようと顔を上に……………。

「早く出て来おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおい！……！！！」

顔面に足が直撃して、吹っ飛ぶ。

幸いゲームに支障はなかったものの、身体は致命傷だ。

（鼻血でなかったけど、頬が真っ赤だ……………学園に着くころには治っ  
てるかな？）

頬をさすりながら、目の前にいる幼馴染に声をかける。

「く、玖梨紗か……………。分かったから、怖い顔するなよ……………」

衝撃の高校デビューを果たしてから、3日が過ぎていた。

普通に授業も始まってこれから、というところ。

俺の家は学校から距離があるため、毎日朝5時起きというハードスケジュールになっている。

俺はそれより更に早い時間、4時に目覚めて、空き時間にゲームするという日々だ。

今日は、ちょっとやりすぎたらしい。いつもより10分オーバーだ。

「カバン持って。行くわよ」

そう言っただけカバンを俺に向かって放り投げる。

「なあ、玖梨紗。ちょっといいか？」

俺はカバンをキャッチして言う。

「ん？何よ」

何のことかわかっていない様子だったため、俺は教えてあげることにする。

「今日は部活動見学で授業全部つぶれるんだぞ」

聞いたことが無いけど、美畑学園の部活動はかなり活発らしく、部活動見学も大規模とのこと。

だから見学だけで一日使うとか。しかも規定の時間まで帰れないと

いう、まさに地獄。

今日は見学日のため、もって行くものは強いてあげれば筆箱、昼ごはん、飲み物や財布などくらいだろう。

しかし、玖梨紗のカバンはパンパンだった。多分、貰った時間割どおりの教科が入ってるんだろうな。

それを聞いてから、玖梨紗の顔はあつという間に真っ赤になる。

「うう、うるさい！！ちよ、ちよっと待ってなさい！」

ボタン、と扉を閉め、ズダダダと猛スピードで階段を下りる音が部屋まで響く。

俺はカバンに筆箱とプレイストアポータブル、略してP Pを詰め込んで、キッチンに向かう。

キッチンにおいてある弁当をカバンに入れる。

「たきと 瀧人ー、いつもより遅いわね？」

母さんが話しかける。

俺は冷蔵庫からお茶をだして、コップに注ぎながら答える。

「10分くらい大丈夫だって」

お茶を流し込んでいると、今度は父さんが口を挟む。

「その一瞬が命取りになるんだぞ。分かっているのか？」

お茶を飲みきって、父さんのほうに顔を向ける。

「大丈夫だって。いつも20分くらい早く着いちゃうんだから」

ニカツとはにかむと、コップを流し台において、カバンを担ぐ。

すると、途端に玄関の扉がバァン！と大きい音を立てて開かれる音がした。

「灌人おー！！！！」

玖梨紗の声だ。俺はキッチンのドアを開いて、改めて挨拶をする。

「おはよう、玖梨紗」

「余裕かましてる場合じゃないわよ！早くしなさい！」

そう突っ込まれ、俺は振り返って親に

「行ってきます」

と告げ、靴を履く。

『いつてらっしやい』

その両親の声を聞いて、ドアを開いて、学園へ向かって歩を進める。

俺と玖梨紗は一緒に登校している。

家が近い、グーダラな俺を叱咤してくれるという理由で、あやす 絢栖家と  
稲菜木家いななきで同盟を組んだらしい。

（まあいいんだけどね。小学校・中学校も一緒だったから違和感無  
いけどね……………）

時々カップル、否リア充と間違われるが、決してそんな良いものじ  
やない。

「ねえ、部活、どこに入る？」

「入らない」

俺は即答する。

(部活なんてやったらゲームする時間が減ってしまう！そんなの嫌だ！)

「やっぱりね。私もそんなとこだと思つたわ」

玖梨紗はため息混じりにそう俺に言う。

それから適当な会話をしながら歩いていると、人ごみの中に竜俊<sup>たつとし</sup>を見つけた。

「おつ、竜俊じゃんか。おーい、たつ……………」

声が遮られた。

何故かと言うと、後ろに体重がかかってきたから。

重い。レンガか何かか？

「玖梨紗、お前太つたか？」

そう顔を振り向きながら聞くと、違う顔が目の前にあった。

「おはよー、絢栖君っ」

三守<sup>みもり</sup>さんだった。抱きつくよつにのしかかっているらしかった。

「くぁwせdrftgyふじこrip・@」!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!





(く、玖梨紗！？これは暴力モード入ったか？)

声がまず震えていた。次に殺気が感じられる。

最後に、周囲の目線が気になっていない。暴力モードだ。

流石に3日も続くと、キレてきたか。怖い……。

「あはは、あなたも面白いねー。ねね、名前は？」

(み、三守さんっ！あなたはこの空気を察しないのか！？どう考え  
てもやばいオーラ出てるぞ！)

あれか、空気読めない、略してケーワイかつ！

「名前ですか？稲菜木ですけど」

「稲菜木さんかあ、よろしくね。あ、そうだ。私、用事あるから  
先に学園行ってるねー」

言いたいことを全部言って、さっさと行ってしまった。

生真面目な稲菜木玖梨紗と面白いこと大好きの三守千春<sup>ちほみ</sup>。

あまりこの二人は会わせないようにしよう、と決めた。

教室。

「おはよう、竜俊」

机にカバンを置きながら挨拶する。

竜俊も振り向いて

「よう」

と挨拶を交わす。

「竜俊は何か部活動するのか？」

話題も無かったため、適当に今日のことについて切り出す。

「俺は体力つけたいし、陸上にでも入ろうかな。灌人は？」

嫌だ、と即答したかったけど、怠け者と思われるのも嫌だったから  
ちよっと間をおいて答える。

「うーん、興味がある部活があればな」

(絶対入らないけど)

竜俊も

「そりゃそつだよなあ」

と愛想笑いしながら、話題を提供してきた。

議題は、竜俊の妹について。

「俺に妹がいるんだけどさ……っと、そつえば、弟とか妹っていないのか？」

「いないな。隠し子がいるのかは知らないけど」

HAHAHAと笑う竜俊。いや、隠し子がいたらそれはそれで驚きなんだけどな。

「で、妹が最近帰り遅いんだよ。兄貴として心配でさ」

(そんなこと俺に聞かれてもな。どうしろと?)

少し考える。

例として、俺に暴力的で世話好きな妹がいるとする。

その子の帰りが最近遅かったら……。

(直接聞けば良いじゃん)

俺はそれを告げようとしたが、先生が教室に入ってきたため会話を中断する。

「よし、皆いるな。今日は部活動見学だ。俺のクラスにいる以上、部活動には参加しろよ。いいな？」

「なんで？」

俺はこそつと竜俊に聞く。

「知るかよ。先生たちの間で何かあるんだろ、多分」

「この学園は知ってのとおり、部活動で勇名を馳せている。その学園で部活動をしなないなど言語道断だ！」

ああ、オーケー。把握した。

部活で有名なのに部活入らなかったら、なんかなあ……だしな。

「よし、10分後にグラウンドで点呼を取るぞ。急げよ」

そついい残して、さつさとどこかに行ってしまった。

(ああいうタイプ嫌いだな。熱血？紛いみたいな)

朝のホームルームが終わって、教室ががやがやし始める。

「灌人」

俺を呼ぶ声の発信者は玖梨紗だった。

玖梨紗の方に向き直る。

「先生の話聞いた？」

（言いたいことは分かる。部活に入れて事だな）

だが、断る。

ゲーム時間が減るのは寿命が減るのと同義だ（俺の中で）。故に自ら早死にするなんてごめんだ。

「嫌だ。ぜつつつつつつたいにな！」

玖梨紗はもともと期待していなかったのか、肩をすくめて教室から出て行った。

俺はその姿を見送り、間を置いて教室から出て行く。

気がついたら、竜俊の姿もなかったから。

「どろろしてこつなつた？」

グラウンドに到着すると、想像と違った光景が目に入った。

俺の勝手なイメージだけど、部活が活発だったら顧問も厳しく、皆整然としたスポーツマンってイメージだった。

俺が中学の時の部活は弱小だったから、余計にそう思っていた。

けど、その考えを根底から覆す光景が、目の前に広がっていた。

屋台。見渡す限りの、屋台。やきそば屋、ビアガーデン（なんで高校に……）、クレープ屋、アーケードゲーム、お面屋。

それぞれの店で学生が、教師が、通りすがりのニートが楽しそうに、飲み食いしたり、ゲームを楽しんだりしている。

それは部活見学というよりは祭り。文化祭という言葉がふさわしかった。

（これは、部活見学じゃないだろ……先生も何やってるんだよ）

すると、不意に怒声が飛んできた。

「お前ら！何やってる！！」

俺の担任だった。生真面目な彼には、この状況はヒステリーものだろう。

そこで俺は、ふと食い違いに気付く。

(あれ？つてことは……………)

「よお、谷沢<sup>やんざ</sup>。機嫌は……………悪そうだな」

そこに現れるはトラブルメーカー<sup>まきがみき</sup>牧ヶ崎。明らかな作り笑いをしながら近づいてくる。

(嫌な予感しかしないな……………)

俺は先生に気付かれる前に、そそくさとその場から去った。

「こんな状況だけどなあ……………」

財布の中を見る。とてもじゃないが、乱痴気騒ぎできるほどの金は無い。

(しょうがない。俺は校舎裏でサボらせてもらっつか)

というわけで、早速校舎裏へ向かう。

(あれ？先客か?)

校舎裏には、誰かの影が見えた。一つ。

(誰だろ？もしかして、俺と同じように金がなくて困ってる奴か?)

興味本位で、物陰から覗く。

後ろにピヨンと出たポニーテールに、白い肌。

三守さん。

正直、意外だった。いつも俺をからかう、もとい俺に絡んでくる人  
懐っこい三守さんが一人なんて。

(友達とはぐれたのか？この騒ぎようならしょうがないきもするけど……)

その時、俺は見てしまった。

いつも笑っている三守さんの頬を伝う、涙を。

(え……………?)

疲れているのよ。そう思って、目をこする。

(毎晩毎晩ゲーム三昧で、さすがに目がいかれたか？ありえる話だ。  
疲れすぎだな)

そして再び三守さんのほうを見る。



そこにいる三守さんはいつもの俺に絡んでくる三守さんで。

そんな明るい三守さんが泣いているわけがなくて。

(ほら、泣いてない。俺の勘違いだよ、まったく)

俺は泣いてるわけが無い三守さんに向かって手を振る。

すると三守さんも気がついたように手を振り返す。

「どうしたのー？もしかしてサボりにきた？」

笑顔で話題を振る三守さんに、俺も答える。

「まあ、そんなところ。三守さんは？」

「私はねー……………なんだと思う？」

俺は思ったことを率直に言った。

「隠れて SP ですか？」

「あつたりー！」

二人同時にPS を内ポケットから取り出す。

「あー！絢栖君も持ってたんだ！じゃあ、二人でプレイしよう」

ここで、プレイストアポータブルについてちょっと説明しておこう。

プレイストア3つてのを俺は持つてるが、これは以前説明したとおりネットからゲームを拾ってくるゲームだ。

これは最終段階であり、3があるからには当然1も2もある。

しかし、1はストアを開くにも関わらずソフトを現ナマで購入する形のゲームであり、2はネットマネーが使えるようになったが、セキュリティの面で問題があって発売1年で回収する運びとなっている。

つまり、グラフィックやシステムなどの観点からも、3は完成品なのだ。

そして、ポータブルはそれを持ち運べるようにしたもの。

といっても、開発は2と3の間に行われている点、携帯ゲーム機ゆえのグラフィックから、3よりは見劣りする。

さて、結構語ったが、結局は持ち運べるプレストってこと。

「いいですよ。で、どのゲーム入ってます?」

「モンスターペアレントハンターポータブル3rdがあるよっ。どう?ひと狩り」

「おっ、いい趣味してますね。俺も入ってますよ。じゃ、ひと狩り行くってことで」

早速俺たちはモンソンを起動して、木の陰に隠れる。

(さすがにバレバレは嫌だからな)

そして、オープニングが始まる。

突然、三守さんの口が開いた。

「ねえ、絢栖君。いつまで、私に敬語使うの？」

俺はとっさのことだったから、なんていったのか分からなかった。

「え？何ですって？」

そう聞き返しながら振り向くと。

目の前に三守さんの顔があった。

「のおおおおおう！？」

奇声を上げながら後ずさる俺。

を追いかける三守さん。

「ねえ、何でいつまでたっても敬語なの？」

(敬語？ああ、さっきはそれを聞いたかったのか)

俺はようやく意図を察して、女性に対する免疫が無いことを三守さ

んに話した。

「へえ〜。そうだったの。じゃ、緊張するせいで敬語になっちゃったんだ」

「そういつことですよ」

俺の頬は急激に熱を持つようになり、今や真っ赤になっていることだろう。

三守さんはあごに手をあて、少し考えてからある提案をした。

「じゃあさ、今からやる狩りで私がモンスターペアレントを討伐したら敬語やめてくれる？」

「？敬語で話して欲しくないんですか？」

俺のその質問に、三守さんは普通に答えてくれた。

「なんかさ、他人行儀みたいじゃない？敬語って。私たちもう友達なんだし、敬語で話されるのはちよっとね」

なるほど、一理ある。

しかし、俺だって好きで敬語を使ってるわけじゃない。

何より。

(ゲームで宣戦布告されたら、受けてたつのが俺のプライド！)

俺は敬語云々の前に、叩きつけられた挑戦状に受けてたつことにする。

「いいですよ。じゃあ、リ レウス希少種を狩ることにしましょう」

二人の狩人ハンターは不適に笑う。ゲーマーとしての血が騒ぐのだ。

俺は得意の武器を選択、アイテムも念入りに確認する。

「遅いよ？私待ってるんだけど」

「あせる必要はありませんよ。まだ時間はたっぷりありますから」

アイテムと装備の万全を確認した俺は、通信プレイ用の集会場へと足を向ける。

集会場では、三守さんが既にクエストの受注を終えており、暇つぶしに踊っている始末。

（見せてやる。俺の実力を！）

準備を全て終えた二人の狩人は、その狩場へと踏み出した！！！！

ンハンの続きが気になるって？それじゃあ次回に期待してくれ！

へえ〜。そうだったの。じゃ、緊張するせいで敬語になっちゃうんだ（後書き）

今回、前回に比べて文字数が多くなっています。

なぜかって？それは本編を読んでからの楽しみ

さて、次回からちゃんと個別ルートに入ります。

今まではちよいちよい玖梨紗が絡んできてたので、今ルートのメインヒロインにも活躍の場をあげようと思います。

で、そのきっかけがパロディネタ。……いいじゃないですか。最

近過保護の子供がどうこう言うニュース、多いと思いますよ。

まあ、あくまで創作の中のゲームなので深く考えないで。

でわ最近のマイニュース。

部活いてないと時間進むの早く感じませんか？学生の皆さん。

作者は非常に早く感じます。文化部だったのに。

あとがきを書いているのは基本的に土曜日なのですが、いつもなら嫌々行つた部活が、いざ無くなってみると少しむなしく感じます。ま、行くわけじゃないですけど！強制じゃありませんし！

それと、今日（土曜日）文化祭のためのイベントに参加しました！いやあ、驚くほどにつまらなかった。なにより、何ゆえ自転車で隣の市まで走っていったんでしょね。リーダー曰く、「バスは金かかるから却下」だったので、作者含むメンバー全員で雨の中自転車をとばしました。

思っていた以上に早く着いてしまったので、作者はイベント先の人に時間の繰上げを頼みました。結果、15分の繰上げに成功したのにメンバーから総スカン。……なんでだよ。

さて、作者の被害妄想（事実ばかりだけど）もほどほどに謝辞を。

「おお！更新されてるじゃん、早速読もう！」と待っていてくれた心優しい読者様、「生徒会長万能で検索かけたら出たよ……」と軌

跡の出会い方をした読者様、その他様々な思惑を抱えて読んでくださっている読者様各位に、感謝の言葉をここに捧げます。

あぬ、あのさ、いいいいまから、いっしょに、やたい、まわわ、まわ、まわ、らないか

完全に千春回です！

テンプレ展開許してネ

作者の平凡な脳じゃこれが限界なんですよお

！

少し短いのは勘弁してネ？丁度良くしようと思ったら短くなっちゃったんですよ……



あぬ、あのさ、いいいいまから、いつしよに、やたい、まわわ、まわ、まわ、らないか  
ここは、とある学校の廊下。

俺と連れれの『はるちん』は目標のいる教室を覗き込んでいた。

リオ　ウス希少種。それが奴の、モンスターペアレント化け物親の名だ。

常に銀色の高そうな装飾品をつけ、圧倒的詭弁を用いて我が子を保護せんとするその姿は、もはや空の王者といっても過言では無いだろう。

空の王者と呼ばれる化け物親は多数存在しているが、特有の詭弁で裁判に持ち込み、税収の如き金をせしめ、銀色の装飾品を身につけることから、希少種と呼ばれている。

特に、父親の場合に　オレウスと呼ばれることが多い。母親の場合、  
リオレイ　というのが一般的だ。

さて、この化け物親を征伐するべくして立ち上がった俺たちだが、  
その圧倒的息子愛を見て、少し足がすくんでいるように思えた。

いや、これは武者震いと呼ばれるモノなのかもしれない。

「ねえ、『タッキー』」

不意に、『はるちん』に話しかけられる。

「なんだ？」

そう言いながら『はるちん』の顔を見る。

その表情からは、獲物を狩らんとする狼、いや獅子のような気迫が感じられる。ハングリー精神に近いかもしれない。

「この戦いが終わったら……分かってるよね？」

俺はその質問に、静かに答える。

「ああ。分かっている。だが、まずはレ ス希少種を倒す！それからだ」

俺は決意を胸に、武器を手に、敵を見据える。

奴はまだ、俺たちの存在に気付いていない。

だが、このままでは時間が過ぎるだけ。

意を決して最初に踏み込んだのは『はるちん』だった。

半開きだったドアを勢いよく開けた彼女は手に持った『トマホーク』をレウスに向かって投げつける！

ザシュツ。左肩に直撃し、傷からは赤い液が狂ったように飛び出す。

ウスはこちらの存在に気付く



突っ込みながら回避できるのは、相当の熟練者だけだ。

だが、目の前の同士は、いとも簡単にそれを避けた。

目標を外した火球は、教室の壁に当たり、その猛火をあたりに撒き散らす。

たちまち、教室と廊下は燃え盛る火の糧となる。

「『はるちん』っ！」

俺は突っ込んだ『はるちん』が心配で、教室へと突入する。

そこには、返り血を浴びた『はるちん』と激昂状態のレウスが対峙していた。

《ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！》

叫ぶレス。だが、体はいたるところから赤い汁が吹き出ており、決着は、目に見えていた。

レウ は再びブレスの体勢に入る。

俺は隙を逃さず、硬直状態のウスに決着用のRPG2を頭に撃ち込む。

そのミサイルは軌道がそれることなく、直撃し、レスの頭を吹き飛ばしたように見えた。

しかし、その一撃はレウ に届いていなかった。

飛び込んできた別の化け物親モンスターペアレントに阻まれてしまったからだ。

リオ イア希少種だと!?

金の装飾を見れば一目瞭然だ。何より、ウスをかばったことが決定づけている。

二匹が揃ったら面倒なことになる。その典型的な例が イアとレスだ。

だが、目的はあくまでレウ。レアは副産物に過ぎない。

ウスを倒せば、この狩りは終了。撤退も許可される。

「『はるちん』、一度引け!二匹相手に接近戦は厳しい!」

見たところ、『はるちん』は近接攻撃タイプ。タイマンなら負けな  
いだろうが、これでは不利だ。

(いくらレイが大ダメージを受けているとはいえ……………)

と思った瞬間、『はるちん』が戻ってきた。

「終わったよっ」

と報告する『はるちん』。

唐突な形で、狩りは終わりを告げた。

「上手いなあおい！」

俺は絶叫する。俺よりも上手いかもしれない。

三守<sup>みもり</sup>さんはニコツと天使のような（俺にとってすれば悪魔）微笑を俺に向ける。

「レス狩ったの、私だよ？」

残酷な現実を向けられる、俺。

約束。レウを三守さんが狩ったら、俺は三守さんに敬語を使わない。  
い。

女の子に免疫がなく、前にいるだけで極端に緊張して敬語になってしまう俺には酷な話だ。

けど、約束は約束。ゲームが絡んだら、破るなんてまねできない。

（俺はゲームが絡むと、紳士になっちゃうんだよな）

俺は精一杯の努力で三守さん……三守に話しかける。

「み、み、み、み、みも、みもも……み、、、も、、、」

(やばいつ！名前だけで噛みまくりだっ！)

俺は今、林檎より真っ赤になっていることだろう。

目の前の三守さ……三守は笑ってるんだろうな。もう涙とかで前が見えない。

「み……みも、り！」

(やった！名前を呼び捨てできた！俺、満足！)

その達成感に浸っている俺に、追撃をされる。

「ん？何？」

話題を提供しろということだと思っただが、名前を呼び捨てにできた俺には簡単すぎる要求だ。

俺はさっさと口にしてしまうことにした。

「あぬ、あのさ、いいいいまから、いっしょに、やたい、まわわ、まわ、らないか？」

(完璧だ！)

勿論、自分の中では。結構噛んだ気もしたが、違う。どもった気もするが、違う。

俺は

「あのさ、一緒に屋台回らないか？」

って言ったただけだ。間違いなんて…………。

(これデートの誘いじゃねえ?!?!?!?!?!?)

気付くのが遅すぎた。

話題のチヨイスを間違えた。これじゃデートの誘いみたいだ。

(断ってくれよ?三守さん…………三守にそれを期待するのは無理だと思っけど)

「うん、いいよつ。えへつ、あやす絢栖君も結構大胆だねえ」

俺の予想…いや願い、叶わぬ願いは見事に外れ、俺は三守さん…………三守と一緒に屋台を回ることになった。



俺は、女の子が嫌いとは言わない。

むしろ、俗に言われる『リア充』というものに、憧れのような感情だっただけ抱いていた。

キスだっただけしてみたいし、その先だっただけ興味ある。

実際、緊張するのは同年代くらいで、5、6ほど年齢差があれば夕メロで会話だっただけできる。

けど、すぐ隣にいるのは同じ学年の女の子で。

緊張しないわけがなくて。

(こんなに近くに女の子………鼓動聞こえてないか?)

自分でもありえないほど心臓がバクバクしてる。

周りの視線も気になる。怖い。ここまでくると恐怖を感じる。

(顔真っ赤じゃないか?俺。で、多分こういうこと考えるのは俺がヘタレだからか?)

俺から誘ったのはいいけど、さっきからまったく会話が無い。

騒がしい三守一(もう慣れた)にしては珍しい。

とは言っても、俺から話しかけるには難易度が高い。さっきとは違って人の目がある。

二人きりも緊張するけど、多すぎると更に緊張する。

ようはただのヘタレなんだろうな。

このまま沈黙を押し通してもいいけど、何となく話さなければいけない使命を感じた。

「な、なあ三守。何か食べるか？俺腹減っちゃってさ」

この場で一番いいだろう話題を振る。

すると三守はこっちを向いて微笑んだ。

「うんっ。私も丁度何か食べたかったんだー」

至近距離のスマイル。俺にはまぶしすぎる。

すぐさま視線を逸らし、三守を引っ張っていく。

(とりあえず、適当に店入るか。あ、でも俺金ほとんど無いな)

よく考えれば、金が無いから校舎裏に行ったんだと気付き、落胆。

(考えれば考えるほど腹減ってきたな……)

まあ、目的は『三守に何か食べさせること』にしよっ。別にミッシェンコンプリートとかで金貰えるわけじゃないけど。

数分無言でぐるちよろして、ようやくすいてて安い店を見つけた。

店舗を出してるのは……図書委員会？

部活見学っていう面目で、委員会のメンバーも集めているらしいから。

(どれだけ適当なんだよ、先生方……いや牧ヶ崎)

予想、主催は生徒会。

(まあそんなことはどうでもいいか)

俺は三守を店に誘導する。

『いらっしやいませ』

図書委員の店だからか、本(っぽい)裝飾があちこちにある。

とりあえず奥の席に座る、三守と俺。

「はあ〜っ。人が多いね」

今まで話さなかった三守が突然話しかける。

「そ、そうだな」

(しまった、またどもってしまった！)

すぐさま後悔する。

「なあに？もしかしてリア充？」

店員がニヤニヤしながら水の入ったコップを持ってくる。

「ち、ちちちちちちがつ、ちがつ、ちがつ、ち……」

噛みまくり、逆に勘違いされる。

「ははっ、可愛いねえ。動揺しすぎじゃない？」

からかわれてる。

「あははっ、違うんだよね〜。絢栖君は緊張してるんだよ〜」

そこで一撃入れる三守。

（ナイスカット、三守！）

心の中で賞賛する。

「あらら〜。女の子の前で緊張しちゃう純粹君なんだ？」

店員はクスクス笑う。

（くそ。恥ずかしいぜ……………）

今でも顔は真っ赤だと思う（というか熱い）。

とそこへ近づいてくる人物一人。

「手塚<sup>てづか</sup>ちゃん、客をそそのかさないで。その調子じゃ進路<sup>しんろ</sup>だって決まらないのよ?」

(……………綺麗だな)

青く長い髪に、見事なスタイル、物静かな物腰、凜とした佇まい。見る人を魅了する大人の魅力。

俺も、その魅力に引き込まれる。

(委員の顧問かな?背も高いし)

「すみません、委員長」

「生徒かあああああああああああああああああああああああああああああ  
あ!!!!!!!!!!!!!!」

もはや絶叫に近い叫び。店内の客含め店員、委員長さん、三守までも驚く。

「な、何?それって、私が18歳に見えないってことかしら?」

「ああ、いえ、そういうわけではなくてですね……………」

じじじもじじじ。

気がつけば、店の前に野次馬が大勢いた。さっきのシャウトのせいだというのは百も承知だ。

（目立つちゃったな。ここはひとまず退散させてもらおうかな）

そう三守に言おうとするが、三守の行動は一步先を行った。

手をつないで、二人で屋台裏へと逃げ込んだのだ。

勿論、俺はパニック状態だ。

（た、タメ口で話せるのとボディタッチができるのとは別問題なんだよおおおおー！！！）

目がぐるぐる回って、野次馬にどんなのがいたのか、何を言っていたのか分からなかった。

結局、屋台裏から更に裏口を使って学園の庭に出た。

ルートは知らない。

「どうしたんだよ？目立つの嫌いなのか？」

もう、タメ口にも結構慣れた。

(俺って飲み込み早いんだな。これは才能の一じゃないだろうか)

そんな風に自画自賛しながら、三守の回答を待った。

三守はへたり込みながらも、ニコツと笑って答えた。

「ははっ。意外だった？」

「そりゃそつだ」

俺は即答する。

「俺に後ろからタツクルしてくるような奴が、目立ちたがらないとは思うまい」

「だよー」

二人して笑う。

笑った後、三守は突然立ち上がった。

「ちょっとお花摘んでくるね」

俺は似合わない言動に、思わずにやける。

『花を摘んでくる』とはトイレのことだが、常に暴走気味の三守がそんな言い回しを知っていたとは……。

そんな三守に、俺は無言で頷く。

走り去る三守の後姿を見ながら、俺はふと思った。

（あれ？そつちって学園の校門じゃなかったっけ？トイレ無いだろ  
う）

別に覗きたかったわけじゃないけど、何となく三守について行って  
しまった。

俺の思ったとおり、その先は校門だった。

ご丁寧に『部活、委員会に入らない奴はさっさと出てけ』と書きな  
ぐつてある。さすが牧ヶ崎<sup>まきがさき</sup>。

三守はそのまま、出て行こうとするところだった。

（庭に置いてきぼりにしようとするとはこれ如何に！？）

謎、というか憤りの方が上回った。

人間、怒りに身を任せれば何でもできるものだ。

「おい待てよ、みも」

「

そう言って呼びかけようとして、



俺はまた見ではいけないものを見てしまった。

あぬ、あのさ、いいいいまから、いつしよに、やたい、まわわ、まわ、まわ、らないか

ハイハイ、最近ようやくガゼ さん、r oさんの素晴らしさが分かってきた作者ですよー。

初っ端から伏字連発だけど大丈夫か、これ。

で、今『さよらメモリズ』聞ってるわけですね。

作業しながら聞くものじゃないと思ったので、後書きばばと終わらせて堪能します。。。。

早速、謝辞！（早っ

この後書きを見ながら『今更かよ、おっせーな』など悪態をついてる読者様、『思ったけど、こんな感じのタイトルの少女マンガあるよね？』など作者も思っても見なかった抜け穴を見つけた鋭い読者様、その他 s p e c i e l のファンの読者様、そうでない読者様に、感謝の言葉を捧げます。

話の中で矛盾を見つけた方は作者まで！今後の話に修正を加えたり今までの話に修正を加えますので。後になればなるほど面倒なので、できれば早めに！

例えるなら、理由は条件だ。何かを為そうとするための。そして、何かを為す  
誤字脱字、今までの話とかみ合わない点がある可能性あり。注意よ  
ろしくお願いします。

例えるなら、理由は条件だ。何かを為そうとするための。そして、何かを為すた

「ぐっ……うっ……あう……」

不意に、三守<sup>みもり</sup>が泣き出した。

今度は……いや、しかも声に出しながら。

俺は女の子に免疫が無い。

その上泣いているのだから、すぐにでも逃げたい衝動に駆られる。  
身体も震える。

もはや「恐怖」という感情を抱くまでに至った。

だから、俺は一步出遅れた。

「おい、みもりーん」

学校方面から現れた学生が、三守に近づいてくる。

(みもりん？ああ、あだ名か。クラスメイトだな)

俺はそう思っていたが、あいつらの台詞を聞いてそんな考えは吹き  
飛んだ。

「どうしたよ？入学した時とずいぶんキャラちがくね？」

「へっ、今は泣いてるのな。前は笑ってたのによ」

「情緒不安定なんだから言わせんな恥ずかしい」

「フラれたんじゃないかね？ざまあwwwwwwマジめしうまwwwwww  
wwww」

(……………)

聞いててむしゃくしゃするような台詞ばかり聞こえてくる。

(ほんと、重要な時に限って玖梨紗くじりさがいないなんてよ…………)

彼女がいれば、ほんの数秒で片付いただろう。

それを、俺はただ見てるだけ。

俺が怒りを募らせつつも黙って聞いているのに、三守は泣きじゃくった顔でニコツと笑う。

「あはは、今日は泣きたい気分だったんだよ」

ドカツ。

何度耳にしたか分からないほど、聞いたことのある音を聞き、場面を見る。

三守が、地面に倒れる。

「キモイんだよ、いつも笑ってばかりいやがって」

「おいおい、ここ公衆の面前だぜ？やーめーろーよーう」

「に　り　フ　イ　タ　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　w　」

「黙れにわかw　」

そんなことを口走ってる奴らを見ると、むしゃくしゃを通り越してわけが分からない感覚に陥る。

さっきまで心に残っていた「恐怖」さえ吹き飛ばす。

そして気がつけば、俺はそいつらの前に立っていた。

「てめえら、何してやがる？」

口調も、せつかく直したのに、こういう時だけは戻ってしまう。

「ん？何お前、コイツの彼氏？」

さっき三守を蹴った奴が俺にそう質問する。

俺は溢れんばかりの怒りを沈め、静かに答える。

「いや、違うな。が、俺は今、てめえらに怒りつつ感情を抱いてる」

あいつらはケラケラ笑った。

「何それ、正義の味方って奴ですかあ？マジウケルんですけどWWW」

「ハイハイ批判厨乙WWW」

「バカスWWW」

あいつらが何を言ってるのか、意味なんか知らない。

けど、このどうしようもない怒りの先は分かる。

「謝っても許さねえ。潰す」

俺はそいつらに向かって走る。あの時の、牧ヶ崎にしたように全力で。

しかし、今度は止まらず、勢いを利用して拳で一人の顔を強打する。そいつは一撃でぶっ倒れ、周囲の奴は蒼白な顔をする。

「ひ、ヒイツ!?!」

腰を抜かす奴もいる。

鼻汁をたらす奴もいる。

足が震えてる奴もいる。

「次、てめえだ」

俺は鼻汁に向かって走る。

「うわあああっ!」

そいつは愚かにも走り出した。

「バアーカ。逃がさねえつつつてんだろっが」

俺は速度を徐々に上げ、余裕で追いつく。

そして、後ろから足を伸ばし、そいつの足にかける。

俺は体勢を少し崩したものの、転ばずにいたが、そいつは当然の如く転び、顔面から地面にダイブする。



その地面には、鼻汁であろうものが一直線を描かれていた。

「けっ。きたねえ奴だ」

俺はそいつを一瞥すると、腰、足を捜す。

校門の先に、二人の姿があった。

「はっ、校門の外なら無事だとても思ったかよ」

俺は全力で走り、あっという間に校門にたどり着く。

「な、殴れるものならやってみろよっ!」

腰がそんなことを言うから、俺はフルパワーで殴った。

周りの人間は騒然としている。

「あ、ああ……………」

足は震えが頂点に達したか、地面に座り込んだ。

俺はそいつを、上から見下す。

「蹴ったのはお前だったよな? ああ?」

胸ぐらを掴む。そいつは情けない声で懇願してきた。

「す、すいませんでしたっ! 今後一切、いじめはしませんっ!」

それを聞いた俺は、にやり、と歪いびつに笑う。

「許さねえつつつたる、バアーカ」

胸ぐらから手を離し、そいつの顔の側面に思いっきり蹴りを入れる。

一撃で白目をむいた奴を最後に校門の傍の木にもたれかけさせる。

(……………さて)

俺はすぐ近くの木にもたれかかっている三守に寄っていく。

三守は俺のほうを向いた。が、すぐに顔を逸らす。

目元は赤くなっていたし、目も少し充血していた。

「う……………こっち、見ないで。見せたく、ないから」

何をか、は分かる。

本当なら、ここから逃げたい。

何より苦手な……女の子の泣いてるところを見たのだから当然なのだけれど。

それでも、今ここから逃げてはいけないと思った。

一つは、ここで逃げたら女の子に対する免疫がつかないと思っただから。

もう一つは、単純に三守がかわいそうだったから。

けど、やっぱり怖かった。敬語はおろか、話しかけることさえベリ―ハードだ。

だけど、俺は勇気を振り絞って、声を出した。思い切り虚勢を張って。

「嫌だ。ここで逃げたら、男が廃るってものだろ？」

そう言い切ったものの、実際は震えている。

怖い。逃げたい。ゲームに逃げたい。

それでも、せめて顔に出ないようにする。

「そんな、意地張らなくていいよ。女の子に免疫、無いんでしょ？」

ばれてる。俺は震える身体を一生懸命抑える。

「そんなこと、ない」

当然、嘘をつく。自分でも白々しいって分かってるけど、もう引けない。

「……あはは。優しいね、絢栖君は」

か細い笑い声。あの時、あいつらにしたのと同じ笑い。

聞くだけで心が痛んだ。

「話……聞かせてくれるか？」

三守はチラッ俺を見、頼み事をした。

「聞かれたくないの。だから……こっちきて」

そう言って、自分の右隣を示す。

俺が正常でいられるか、なんて分からない。意識が飛ぶかもしれない。

けど、俺には一つしか選択肢がなかった。

俺は三守の示した場所に座る。できるだけ平静を装って。

「ん……」

すぐ近くまできたと分かった三守は、静かに語り始めた。

時は遡り、入学式当日。

私、三守千春ちちはるは朝早くに学校を出た。

(ふっふーん どんな人いるかなー?)

気分はピクニックか遠足で、機嫌もすごく良くて。

そのせいかもしれないけど、早足で歩いてたみたいで、思ってたより早く学園に着いたの。

だから、適当にぶらぶらして時間潰して、教室に入ったの。

こういう時は第一印象が大事って思ったから

「おっはよう

」!

って挨拶したの。

そしたら、皆急に黙っちゃって。

そして小声だけど聞こえちゃったんだよ。

「何、あの変なの」

「もしかして、このクラス？」

「痛い子。無視無視」

「あーいつのアニメの中だけにしてくれよ」

って言葉。

でも、ここで頑張らなきゃって思って。

「テンション低いぞー！上げてイコ〜！」

みたいなこと言って雰囲気盛り上げようとしてたけど、結局変わらなかったの。

入学式のあの時まで、誰も話さなかった。

「こいつ、絢栖瀧人を生徒会に加入する！依存はあるか!？」

「勝手に何を言ってるんだあんたは!?!?!？」

驚いたよ。あの時のゲーマー君がこの学校にいたから。

でも、他のクラスメイトたちの反応のほう気になったな。

「ちよ、、、、、生徒会長、滅茶苦茶じゃねえか」

「あの子かわいそう……………見せしめってレベルじゃないし」

「顔真つ赤だよ。ひっでえ会長だな」

「受け狙い？受け狙いだよな？マジじゃないよな？」

「『<sup>マジ</sup>本気で私を愛しなさい!』ってか？」

「五月蠅い黙れエロゲ厨」

「待ちな。ミナトの作品よりもオクトーバの作品のほうが感動でき

るぞ」

「男子ってなんでそうエロゲに走るわけ？もっと面白いものなんて世の中たくさんあるわよ」

「好きなゲームは？」

「『さくらん桜蘭高校ホストクラブ』」

「腐女子じゃねーか！エロゲを批判する権利ねえよ！！」

「失礼ね！ヲタと腐女子じゃ品格が違うのよ！」

「勝手に会話に割り込むな！つか『腐』ってついてる時点で品格最悪だろ！」

『それもそうか』

『納得してんじゃねえよ！！』

笑い声。私が挨拶した時には無かった反応。

私も、そういう評価が欲しかった。

私は、皆と楽しく、笑いたかった。

仲良くなりたかった。



だから、また明日リベンジしようと思ったの。

(さっきは皆びっくりしたただけだから。1日置いたら、今度は受け入れてもらえるはず……)

(……………)

俺はイジメに発展する過程を、ただ黙って聞いていた。

「それで、次の日に学園に行ったら……………行ったら……………」

嗚咽が三守の口から再び漏れる。

それ以上は聞いてて辛くなりそうだったから、口を挟んだ。

「もういい。それ以上は何となく分かる」

三守は語るのを止めた。そして、俺のほうを向き、再び口を動かす。  
「今まで……め、迷惑、かけちゃったね。わ、私は、ただ……自分の、境遇が、嫌で、それで、絢栖君に八つ当たりして……」

「それ以上言うな」

もうほとんど、言いたいことは察していた。ただ、それを三守の口からは聞きたくなかった。

「じゃあさ………今までののは全部、八つ当たりだったのか？」

肯定。首を縦に振った。

「そうだよ………本当にごめん。迷惑だって、分かった………」

突然、三守は立ち上がった。

「愚痴聞いてくれてありがとう。もう、しないから」

そっぴい残して、去っていった。

俺なら余裕で追いつける速度だ。言いかけた言葉を問いただすこともできる。

けど、それはしてはいけないと思った。

そして、俺の中に不思議な気持ちが残留している。

（俺は………どう感じてるんだ？親しくしてくれた女の子が泣いて

いたから……悲しみ？)

(それとも、緊張しなくて済むっていう……喜び？)

それが何なのか、俺にはわからなかった。

俺は、三守の今までの行動を思い返す。

朝、出会い頭に飛びつく、タックル。

学園で会ったら、そのたびに話しかける。

放課後、下校中にあったら飛びつく。

そして今日、校舎裏で会ったら『敬語を使うな』と言う。

屋台巡りをしている最中は、ずっとすぐ傍で歩いていた。

(それが全部、八つ当たり？自分に構って欲しかったから？笑って欲しかったから？)

回答が出ない。

俺には、分からない。

ずっとその場でたたずんでいると、まきがさき牧ヶ崎が視界に入った。

「よお、機嫌は……ワーストラしいな」

牧ヶ崎特有の挨拶の後、近くに寝ている生徒に視線を移した。

「…………お前か？」

牧ヶ崎は静かに、それだけを聞いた。

俺は黙って、首だけを縦に振る。

「人が人を殴るには相応の理由がある。『機嫌が悪かった』『むかついた』『意地悪された』etcだ」

牧ヶ崎はさつきと同じ口調で、語り始めた。

「人が何かを為すには、大小問わず理由を持つことが必須条件だ。例文としては『私は暴れなくなったから人を撲殺した』とかな」

「……………」

「だが、俺は理由が重要だとは考えない。人が求めるのは、いつだろうと結果だ。たとえばいそうな理由を持ってしても、何も為せねばそいつはクズだ」

「……………」

「例えるなら、理由は条件だ。何かを為そうとするための。そして、何かを為すために必要なのは意思と力だ」

「……………」

「意思と力は共存すべき存在だ。どちらかが欠ければ、それは為り立たないだろうし、為す事はできない。紫という結果を出そうとす

るが、赤が無い。そう思えばいい」

「……………」

「お前には意思と力の二つが備わっていた。加えて、理由もあった。だからこそ、ここまで完璧に為せだし、結果も伴ったのだろうな」

「……………」

「三守千春には理由があり、意思があつたが、力が無かつた。だから、彼女の思うような結果には為らなかつた」

「……………」

「理由と意思の有無についてはどうすることもできない。だが、力なら、誰にでも工面することはできる」

「……………」

「こいつらの後処理は俺がやっておいてやる。安心しろ、サツにも先公にも公開しない。『なぜならば、俺はお前が気に入っているから』という理由を持ち、『絶対に事実を闇に葬る』という意思を持ち『それだけの権力・知力・実力』が俺にある。この三つを抑えている以上、失敗はしないだろうな」

牧ヶ崎は寝ている奴らにブルーシートを被せ、荷台に積めてどこかへ運び去った。

俺はというと、黙って突っ立ったままだ。

「理由と、意思と、力……………」

その三つが、頭の中を駆け巡る。

(三守には、力が無い……………)

ふと、三守を助けようと考えた俺が、いた。

けど、方法が分からない。

どうすればいいのか。苛める奴らを全員病院送りにすればいいのか、三守の性格を改善させるのか。

それとも、それ以外の方法か……………。

(……………今の俺には、分からない)

助きたい気持ちはあるのに。意思も固まっているのに。それが為せない。

(なんだ。俺にも力、ないじゃないか)

俺はゆっくり歩を進めながら、自宅へ帰った。

なお余談だが、玖梨紗は女子キックボクシング部の勧誘を受けていて、その日は帰れなかったらしい。

俺は夕飯を食べ、風呂に入り、宿題を終わらせ、液晶画面の前に座ってコントローラを握った。

気分が沈んでいたから、爽快プレイが売りの無双シリーズの最新作をプレイする。

いつもならスコアが10000オーバーであるのに対し、今日のスコアは半分以下の4000だった。

例えるなら、理由は条件だ。何かを為そうとするための。そして、何かを為すた

1日遅れましたすみません。

正直に言つと、書きあがつてはいたのですが、忘れてました。

あと、次回も遅れると思います。

なにせ、今まで触れてなかった倫理とか地理とかのプリントの処理をしようと思ひましてね（結構あるんだよね）。

でわ、学校にも行かなくてはならないのでそろそろ謝辞を。

「1日遅れか。何かあつたか作者」と思つてくださる聖人君子のよ  
うな読者様、「思つたけど、これ生徒会長攻略するの?」など疑問  
に思つてくださる読者様、そのほかの思惑を持って読んでくださつ  
ている読者様各位に、お礼の言葉を捧げます。

次回も遅れるかもしれませんが、よろしく願ひします。



俺のことを知った上で話しかけてくれたのは嬉しかったんだよ。だから、助けた

！  
2週間ぶりの投稿になってしまった………待ってた方、申し訳ない

俺のことを知った上で話しかけてくれたのは嬉しかったんだよ。だから、助けを  
「瀧人ー、起きなさい……………」

母さんの絶句する表情が、見なくても分かる。

そりゃそうだ。今の俺はゲームをしてない。

今俺は、ボーっと教科書を眺めている。

別にテストが近いわけでも、授業についていけないわけでもない。

ただ、ゲームをしたくない。そうなることをすることが無い。だから、教科書を眺める。

俺は教科書から視線を母さんに移す。

「何？朝ごはんできてる？」

俺は母さんの答えを待たず、教科書をカバンにしまってリビングに向かった。

なぜだろう、ゲームがしたくない。

昨日、牧ヶ崎まきがさきに変なことを説かれてから、ゲームで上手いようにいかないからだろうか。

無双シリーズだけじゃない。他のスポーツゲーム、リズムゲーム、  
リアルプレイングゲーム  
RPGetc...どれも酷いプレイングだった。

それどころか

(ゲームってこんなにつまらないものだったか)  
と思うほどだ。

いや、多分違う。

人間、誰しもしたいことをしている時が一番充実している。

今まではゲームで充実していた俺が、今は充実して無い。

じゃあ、今は他にしたいことがあるってことか。

(それってなんだ？俺がゲーム意外に興味を持つなんて……………)

考え始めると、真っ先に思い浮かぶのは

(三守<sup>みせり</sup>……………)

頭の中を何度もめぐるのは三守の、泣きそうな顔。

(あいつを、助けてやりたい……………)

理由は単純だ。

俺に話しかけてくれたから。

三守は「八つ当たり」のつもりっばいけど、それでも嬉しかった。だから助けない。

そんな、単純な理由。

でも、そこから考えて出てくる結論は

(どうやって救うんだ……)

俺は、今のままの三守を助けたかった。天性の、まじりつけ無い明るい三守が助けない。

だから、三守の性格を改善する意見は却下だ。他人に迷惑をかける、トラブルメーカーだからこそ、三守なんだ。

だったら、三守を苛めている奴らを全員ぼこるのか？

仮にそうしても、牧ヶ崎が処理してくれるだろう。

けど、それは解決にはならないだろう。

淘汰したって終わらない。

俺は俺が身をもって知ってるはずだろ？

駄目だ。こんな考えじゃ駄目だ。

だったらどうする？

(……………分からない。クソッ)

俺はつやむやした気分を打ち消すように、目玉焼きにかぶりついた。

「お？何、今日は早いじゃない」

朝、俺の家の前で玖梨紗と出会う。

キックボクシング部に勧誘された玖梨紗は「全員をボッコボコにしたら帰してもらおう」という条件でキックボクシング部と乱闘したらしい。

結果は玖梨紗の勝ち。稲菜木家母いななき曰く、「帰ってきたのは午後10時」らしい。

俺は驚く玖梨紗に適当に挨拶して、動き出す。

「聞いたぜ、午後10時か」

それとなく会話のトっかかりを提供する。

(三守のことは一旦忘れよう。一日中これじゃ授業も身に入らない)

俺は頭の中一面に広がる霧を振り払って会話に参加する意思を固めた。

「〜でね、やっぱり部長が一番強かったわ。……聞いているの？」

俺は脳内で演算処理を行う。

さっきの「一番強かった」という意見、「午後10時だったな」という俺の話題提供。

そこから導き出された答えを、そのまま声に出す。

「そーなのかー」

ドスウ！！

朝早くから蹴りを一撃。あ、朝食べた卵がああ……………。

「聞いてないじゃないっ！」

「いや、聞いてたから！俺の中で論理演算をしてだな……………」

「そんな高スペックじゃないでしょうが、あんたの頭っ！」

ひ、ひどい言い様だぜ。

三守だったらこんな言い方は……………。

「……………」

つい、考えてしまった。

俺が急に黙り込むと、玖梨紗が覗き込むようにして

「だ、大丈夫？そんなに効いたの？」

と聞く。

普段から蹴られても何かしらの反応をしている俺だからこそ、急に黙ると心配するのだろうか。

(意外に可愛いところ、あるじゃないか)

俺はそれなりの顔で受け答える。

「ああ。いつも通りの威力だったぞ」

「それは……どう反応すればいいの？」

「笑えばいいと思うよ」

「笑えない冗談よっ！」

バシッと蹴りがあたる。が、さっきほどの威力は無い。

(意外にいいところあるな、玖梨紗にしては)

さっきのことを勘違いしたままだからだろう、控えめらしい。

そつやって、会話したり蹴られたりして学園へとたどり着く。

「むっ、あいつは……………」

玖梨紗が急に身構えた。キックボクシング部の生き残り（死んでないだろうけど）でもいたか？

と顔を向けると。

三守がそこにいた。いつもと変わらない、笑顔で。

視線に気付いたのか、三守も俺のほうを向く。

が、さつと顔を伏せ、校舎に走っていった。

「あら？昨日の脅しが聞いたのかしら？」

何も知らない玖梨紗はきよんとする。

一方、俺はなんとも言えない感情に胸を締め付けられたような気分だ。

つい、俺も顔を伏せて、胸の辺りを抑えてしまう（決して厨二病の症状ではない。断じて）。

「瀧人……………あんた……………」



「え？」

顔を上げると、目の前に玖梨紗が立っていた。

そして、見かねたように声を張り上げる。

「さ、さっきの私の蹴りで、呼吸系がやられたの!？」

「違っつ!そこまでやわな身体してねえよ!」

何故だろうか、今日に限ってやけに引っ張るな。

いつもなら華麗スルーに無視するところだろうに。

蹴っても蹴っても

「ふん」

の一言で済まして、哀れみの心が無いのかと思うほどののに。

(一体、昨日何が起きたんだ……………?)

俺の考えを遮るように玖梨紗の声が耳に届く。

「保健室行きましょう!でなければ中央病院に…………」

「いかねえ!お前の中で蹴りってどんな威力なんだよっ!」

玖梨紗がピタッと止まる。

(あれ？これは本格的に核心に触れた感じだぞ？やっぱり何かあった…………っ！)

俺は一つの結論に至る。

「玖梨紗…………まさかお前人をころす……………」

最後まで言わず、被せるように玖梨紗が自分の罪を自白する。

「そうよっ！私、キックでサンドバッグ壊しちゃったのよ！」

「怖いよ！本格的に怖いよっ！」

生憎サンドバッグの強度がどれくらいなのかは分からないけど、ボクサーが毎日殴っても壊れないものを壊す玖梨紗って…………。

そう考えると、自分の身体が心配になってきた。

(今まで何発も受けてきた玖梨紗の蹴り。身体にがたがきてもおかしくないかもしれない！)

今の俺には三守がどうだの、考えている余裕はなかった。

ただ、自分の身体と玖梨差の身体が心配だった。



「くそつ、だつたら！」

俺は後ろを走る玖梨紗にアイコンタクトをとる。

玖梨紗がコクリと頷くのを確認すると、そのまま校門に向かって直進する。

そして、ぶつかる寸前で俺は少し身をかがめた。

瞬間、大きな衝撃が背中にのしかかる。

そう、これはいわゆる合体技！

かがんだ俺の背中から玖梨紗がジャンプすることで飛距離を伸ばす。

まさに人間トランポリン！

飛距離が伸びたおかげで、玖梨紗は校門をぎりぎり飛び越える。

二人の運動神経と培ったゆーじょーによって為せる技だった。

向こう側で着地した玖梨紗は振り返る。

「瀧人！」

その悲痛（？）な叫びは、俺の耳元にすぐ届いた。

俺は悲しませないように、さわやかな笑顔を玖梨紗に向ける。

「大丈夫だ。お前は早く、病院で検査を受けるんだ」

「瀧人……………」

俺は玖梨紗に背を向け、校舎に向かって歩き出す。

「瀧人！！」

その呼びかけに、俺は答えない。

立て続けに、玖梨紗は叫ぶ！

「私は別に病院に行く気は無いのよ

！」

俺は黙って歩き続けた。

後ろから、肩を叩かれる。

牧ヶ崎。

「よう、気分は……………」

「別に、普通だよ」

言われる前に言ってやった。いつも言われてるからそのそのフラス  
トレーションが溜まっていたから。

だが、言い返された。

「ほう、昨日の出来事があっても、普通、とな？」

俺は硬直する。

強制停止していた思考が再起動する。

「俺はお前のこと、結構評価しているのだぞ？だが、もしこのまま何の気なしにあの件を無かったことにするのなら、俺はお前を勘違いしていたということが」

連続して毒舌を吐く牧ヶ崎に、俺は為す術もなく立つたまま。

「いや、すまない。たかが貴様のような奴に生徒会を任せようと思つた俺が柄にもなく甘かつたようだな」

そして、ふつと去っていく。

が、最後に俺のほうに振り返り告げる。

「今日は朝から集会があるんだぞ？早く来い」

「はあく。だるい」

竜俊たつとしが大きいため息を吐く。

俺は宥めるように言葉をかける。

「しょうがないだろ。あれは」

今回の集会は部活動見学の時に起きた暴動事件のことだった（俺じゃない）。

どうやら、野球部と隣町の不良が喧嘩になったらしく、負傷者が多数出たらしい。

不思議なのは、うちの学園からはけが人が出てないこと。………よっぽど腕っ節強い奴でもいるのか？

で、多額の賠償金を請求され、そのことについて朝から説教。

途中で牧ヶ崎がしゃしゃり出てなかったら、もっと続いたいたことだろう。

因みに、その時牧ヶ崎は放った言葉は

「五月蠅いぞ変態。お前のパソコンの検索履歴、ここで公表してやるうつか？」

だ。………明らかに脅しだ。

教室に戻り、授業の準備をする。

とそこへ、一人の女子が近づいてきた。

「な、何か用ですか？」

とっさに敬語が出る。

その女子は俺を一瞥すると、すぐに教室から出てしまった。

「なあ。女子に敬語使うのやめねえ？もっとフランクにいかないとさ、落とせないぜ？」

竜俊が髪の毛を弄りながら俺に提案してきた。

俺はその質問に、笑顔で返す。

「嫌だ。というか無理だ」

竜俊は再びため息をつく。そんな竜俊に、俺は話を続ける。

「どうしても緊張しちゃうんだよ。なんというか、恥ずかしくなる  
というか……………」

俺はそう説明すると、竜俊は口を挟んだ。

「でもさ、稲菜木には敬語じゃないじゃんかー」

「玖梨紗は別だよ。あいつとは長い付き合いだからな」



俺がそう理由付けすると、竜俊はしつこく質問攻めする。

「何年くらい一緒なら玖梨紗と同じレベルにまで慣れるんだ？」

「ざっと10年」

俺は即答した。本当のとは分からないけど。

(小学生あたりから一緒だからな。最悪でもそれくらいは付き合わないと無理だろ)

それを聞いた竜俊は今度は呆れたように首を振り、ブロックワードを口にする。

「お前、それじゃ彼女できないぞ？」

「……………」

何も言い返せない。

竜俊は真面目な表情で俺に語りかける。

「いいか。俺たち男は女より欲望を抑制する能力が劣っているんだ。典型的な例がレプだ。あれの犯人は大体男だ」

(こいつは真面目な顔して何を言ってるんだろう……………)

突然の問題発言に少し赤面する。

変態なことを言っても、竜俊の語りは止まらない。

「元来、男には我慢というスキルが備わってないんだ。だから、お前が彼女欲しい気持ちは俺にも十分に分かる」

長くなりそうだったため、俺は席を立つ。

「悪い、ちよつと頭痛が……」

勿論、嘘だ。逃げるための口実。

「待てつて。もう少し話を聞いて……」

俺は竜俊を振り切り、走って保健室へ向かった。

「ぶつっ」

学園中を回つての逃走劇だった。

もともと、授業の出席を諦めた俺が負けるわけが無いのだが。

(全速力じゃ負けないけど……竜俊にはまだ秘密にしておこう)

全力じゃなかったにしても、学園中を走り回ったのだから、相応に体力を消費した。

（疲れたな……本気で保健室に行くか……授業休む口実とアリバイができるし）

気分はちょっとした犯人だった（何のかは知らない）。

そんな気分です保健室のドアを開ける。

ガラガラ。

ばふっ！！

（……ばふ？）

一番最初に抱いた感想はそれだった。

（突然の訪問でびびったのか？）

俺のその考えは杞憂だった。

保健室の先生一（？歳独身）は静かに佇んでいた。

「どうしたの？」

ゆっくり、そう聞いた。

20歳後半か30越えという意見まで多岐にわたる議論がされてる

らしいが、実年齢は誰も知らないらしい。

(正直、どーでもいいけど。俺は熟女とか好きじゃないし)

俺はアリバイ工作の為の嘘をいたって真面目に口にする。

「あ、俺頭痛なんで少しベッド借りたいんですけど……」

そう言いながら頭を抑える。

「熱とか吐き気は？」

「いえ、まったく無いです」

先生の言うことに正直に答える。

先生は椅子をくるりと机のほうに向け、何かをメモに書き始めた。

「分かったわ。それじゃ奥のベッド使って頂戴」

そのままの体勢でそう告げた。

「分かりました」

俺は心の中でガッツポーズをして、布団にもぐり込んだ。

(俺ggj!これで1時間目はサボらせてもらっぜ…!)

俺が歓喜に震えていると、先生の声が耳に入ってくる。

「私は私用で席を外すけれど、気分が良くなったら机の上のメモ帳に書いておいてね。いい？」

「分かりました」

俺は返事をしたが、隣からは返事が無い。ただのしか（ry。  
さっきの変な音からするに、隣にもサボリ魔がいるのだろう。

だが、そいつからは何の応答も無い。

（ヘッドホンつけてゲームしてるんじゃないのか？）

そうかんぐる。

しかし、隣のそいつが誰なのか、先生の口から聞くことができた。

「いい？三守さん」

俺は硬直した。

（なん……………だと？）

俺が口をパクパクさせていると、隣から小さく

「はい……………」

と聞こえた。本当に、僅かに聞こえた。

「誰か来たら困るからドアにクローズっておくけど、急患が来たら探して頂戴。どこにいるか分からないから」

そして、ドアが閉まる音。

訪れる沈黙。

その沈黙が、俺にはとても耐えられなかった。

だから、隣の閉まつてるカーテンを思いっきり開けた。

「三守っ！」

そして、その名前を叫ぶ。

盛り上がった布団に向けて。

すると、ゆっくり布団の山が動き、ひょこつと見るのも嫌なほど醜い顔が現れる。

いや、その顔は本当は醜くない。ただ、涙に濡れてぐしゃぐしゃになった顔は醜く見えた。

「……なんで、話しかけるの？」

布団に包まった生物はそう俺に言った。

俺は正直に答える。

「三守を助けたいから」

生物は目を伏せる。

俺は続ける。

「俺は泣いてる三守を見たくない。いや、存在して欲しくない」

「そんなの、身勝手だよ」

はっきり言われる。

「そうだ、身勝手だ。けど、だからなんだ？」

「私に構わなくていいよ。自分のしたいことができなかつたら八つ当たりするような人間と付き合ってたら、絢栖君まで最低の人間になっちゃうよ」

三守は自虐していた。俺の知る限りの末期状態寸前まで。

俺は励ますつもりで、未だ口を動かす。

「人間誰しも、自分のことは卑下するもんだ。断っておくが、三守は最低な人間じゃないぜ」

「だって……私、絢栖君のこと利用してたんだよ？」

「だとしても！」

俺は突然大声を出す。

びっくりしたのか、布団がビクンと動く。

「俺のことを知った上で話しかけてくれたのは嬉しかったんだよ。だから、助けたい」

俺は理由を告げた。

三守は黙る。

「どうすれば今の状態を打開できるかは分からない。けど、助けたいのは本気だ！」

俺は精一杯告げる。自分の意思を。

すると、三守は俺に質問を投げかけてきた。

「どござって？」

それは、今の今まで答えが出ずにいる質問だった。

答えられない。

「それは……………」

その先の答えが出ない。

三守は静かに、俺に告げる。



「私を助きたい気持ちは分かったよ。ありがとう。でも、どうすればいいの?」

答えられない。答えが出ない。

「……………無理だよ。説教したくらいじゃどうにもならないの、分かるでしょ?」

「……………」

俺には何もできない。

それがすごく悔しい。けど、なにをすればいいのかさえ分からない。

「絢栖君が見た私は幻想だよ。だから、私のことは忘れて」

そう言っつて、布団にもぐってしまった。

俺には、それを引き止める力もない。

結局、保健室では1時間目をサボっただけだった。

そして俺が保健室から出る時も、三守はこもったままだった。

俺のことを知った上で話しかけてくれたのは嬉しかったんだよ。だから、助けた

2週間、お待たせしました！

別にネタを溜め込んでいたわけではないので、内容は普通です。いや、若干シリラスかな？

倫理の課題＋地理の課題＋文化祭＋風邪が遅れた理由です（マジレス）

風邪のほうは大丈夫なので心配なく！

さて、ここで作者の文化祭前の苦労話しても仕方が無いので、今回は謝辞だけにさせていただきます。雑談ご所望の方、申し訳ない。

でわ謝辞を（どんなのだっけ？）。今回の話を読んでくださり、ありがとうございます。「2週間も待たせやがって、このクズ作者が！」と罵るDSの読者様、更新を首を長くして待ってください。今頃ろくろ首になっているであろう読者様、その他様々な性癖の読者様に感謝の言葉を捧げます。

追伸：作者はマゾです（どっちかというと）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1768x/>

---

生徒会長は×××!?

2011年11月22日02時00分発行